
Last Angel

カレー紳士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Last Angel

【Nコード】

N2974K

【作者名】

カレー紳士

【あらすじ】

ある日、いつもと同じように学校へ行った甲斐だったが、転校生が来る：

そんな少しいつもとは違う一日が大幅に日常とはかけ離れていく事になろうとは：

天使やら怪獣やら非日常が駆け巡る学園ラブコメディ(?)が始まる。

第一話（前書き）

初登校の作品です。以前、リア友に見せたらひどいと笑われました。ですが、こんな小説でも見てくれる人がいると信じて、投稿しようと思います！

至らないことばかりですが、よろしくお願いします！

第一話

今日は全国的に晴れるでしょう。

いつものお天気キャスターの声が聞こえる。

「母さん、行ってくるね」

いつもの様に学校へ向かう俺。

俺の名前は北村甲斐きたむらかい、光学園高等部2年の普通の男子だ。

「おっはよー！ 甲斐、お前・・・、いつもどうりだなあ・・・、とか思ってただろ？」

こいつは沖野慶太おきのけいた。人の思っていることが大体わかるすげー奴、超能力ってやつさ。

「なんだよ・・・、わりーかよ・・・」

「別にいー」

「・・・なんかムカつくな、お前・・・」

喧嘩モードへ突入しそうだ・・・そこへ、

「あんた達、また喧嘩してたの？」

こいつは桜井長閑さくらいのどか。喧嘩の仲裁役、だけど・・・、

「そんないちいち下らない事で・・・」

『何だとー！』

と・・・、余計な一言で3人ギャーギャー言うことになる。

キーンコンカンコン

いつもの通りに授業が始まろうとしていたが・・・。

ガラガラ

先生と・・・、見知らぬ女の子が入ってきた。

「ねえ、あれ誰？」

今聞いてきたのは麻野瑠璃あさのるり。物静かで、控えめな女の子。

「さあ、転校生じゃないの？」

俺達は、ひそひそ声でいった。

「今日から転校してきた秋野由香里あきのゆかりくん、みんなよろしく頼むよ」

と、先生は言った。

その女の子は無表情で、

「秋野由香里です、よろしくお願いします」

その子は、それだけ言って席に座った。

その昼休み長閑が俺と慶太と麻野を（無理やり）誘って、秋野さんに一緒にお昼を食べようと話をしていた。

「ねえねえ、いっしょにお弁当食べない？」

と長閑が言った。しかし、

「いや、私はいいわ。一人で食べるから・・・」

といって立ち去ってしまった。そのとき一瞬俺を見て眉が動いた気がした。気のせいかな。

「なによ？感じ悪いわね！」

長閑が怒ったように言った。

「あ、あの・・・、まだ恥ずかしいのかもしれないし・・・」
おどおどして麻野が言った。

「そうかもね」

と言い、俺達だけで食べることにした。

放課後、俺達はいっしょに下校していた。

みんな部活で、夜遅くなっていた。

長閑が、

「あの子、家は何処かしら？」

とつぶやいていた。

俺が

「何でそんな事を気にするんだ？」

と聞いたら慶太が、

「そんなのいっしょに帰りたいからに決まってるんだろ？」

「うっ・・・」（こいつだと筒抜けね・・・。）

凶星だったようだ。

「じゃーねー」

「また明日なー」

と長閑と慶太が帰っていく。

「また明日」

と、手を振って別れた。

その途中の公園で秋野さんがいた。

「あれ、秋野さん？」

俺は秋野さんの事と呼んだ。

秋野さんは驚いたようにこっちを見た。

「こんな夜遅くにどうしたの？」

こう聞くと、

「いや、別に何にもないわ」

といって立ち去ろうとしていた、その時一瞬彼女に羽があるように見えた。

「あっ？」

思わず声に出してしまった。

「・・・・・・なに？」

彼女は振り返り、問いかけてきた。

「い、いや別に何にも・・・・」

「そう」

秋野さんがそう言い、夜の闇^{やみ}へ消えた。

第一話（後書き）

第一話、どうだったでしょうか？感想、ダメな点などがありましたら、遠慮せずに

めっためったにしてください。

良い感想があるとうれしいです。

第二話（前書き）

どうも、カレー紳士です。

二話目を出してみました。正直反応が怖いです。

でも頑張っていこうと思うのでよろしくお願いします！

第二話

翌日、昨日のことが頭から離れなかった。

（昨日見たのは夢か？それとも・・・、いや普通に考えて羽があるなんて・・・）

「おはよー。おー？何か考えてるっぽいな？」

慶太がいつもの様に話しかけてきた。

「まあな・・・」

「どうした？いつてみろ」

「どうせ笑われるよ」

俺は答えた。

「ふーん」

といった慶太は誰かに手を振った。

その方向を見ると長閑が走ってきていた。

「どうしたんだ？そんなに急いで？」

俺と慶太が走りながら聞くと

「あんた達何言ってるの！？もう遅刻寸前よ！？」

『何いーーーーー！』

二人して叫ぶと俺たちは全速力で走っていった。

『チャイムギリギリセーフ！！』

俺たち三人は声を合わせチャイムギリギリに教室へ駆け込んだ。

ふーっとため息をつき、秋野さんを見ると、

「あれ・・・？」

うつすらとだが羽が見えた。

「な、え？」

完璧にパニックになった。

「ど、どうしたの？」

その時麻野の声が聞こえた。

「い、いや何でも無いデスよ？」

俺は我に返りながら言った。

走ってきたから疲れてるんだ！そう思い目をこすりもう一度見た。
だが・・・、しっかりある。

（落ち着け落ち着け落ち着け）

その日は疑問だらけだったが学校では人目が多いので昨日の公園に行ってみる事にした。

「じゃーなー」

「ばいばーい」

慶太と長閑と別れた後、昨日の公園へ行った。

「はあはあ、あついた」

俺は秋野さんの事と呼んだ。

「秋野さーん！」

聴こえなかったみたいで気付かない。もう一度、

「秋野さーん！！」

と大きな声で呼んだ。すると、秋野さんはこっちを向いた。

「あの、はあはあ、いろいろ聞きたい事が・・・」

秋野さんは無表情のまま、

「なに・・・？」

と答えた。まだ羽は見える。

「あのっ！秋野さんって、羽生えてたりするの？」

秋野さんはびっくりして、

「見えるの！？」

と、いつもより大きな声で（だが静かな声で）言ってきた。

俺はびっくりしたが冷静になって俺が頷くと、

秋野さんは思いつめたように口を開いた。

「ばれちゃった・・・。でもいいかな、パートナーも見つかったし」

秋野さんは俺を見ていった。

「どういこと？」

そう問いかけると、

「私はね、この世界を守る天使

なの。そして、この世界をつなぐ楔、私が消えれば地球が崩壊する。今その危機があと三年まで迫っている」

俺は信じられなかった。でも、信じるほかなかった。

「何で三年後に秋野さんは消えるんだ？」

秋野さんは、

「私を愛してくれるパートナーと常に行動をともにして、私のことを、

WORLD ANGELと呼ぶやつ、PADから守ってもらわなければならぬの」

俺は混乱した、

「それが何で、地球の崩壊につながるんだ？」

「PADは、三年後に天使一掃計画を発動し、地球上の天使を一掃する」

「そんな・・・」

途方もない話に絶句する。

「そして、私にパートナーがいれば救えるの」

「なんで？」

「PADは私に攻撃を仕掛け、弱らせてから一掃するの、私を襲ってくる奴らは私に触れると消滅してしまうわ」

「だったら、大丈夫なんじゃ？」

秋野さんは首を横に振った。

「消滅すると同時に私の天使としての力を奪っていく。そして、その力が尽きるときが三年後よ」

「天使じゃなくなるとどうなる？」

「私が封じている、時空の歪みが天使としての力をすべて奪うわ」

「それが、天使一掃計画・・・」

秋野さんは頷き、

「そして、私を守ってくれる人を探し、接触してくる敵をすべて倒して、そして王になってもらう人が必要」

「王？」

「そう、天使の王よ・・・この世を守る、ね・・・」

「じゃあ、今のその、王に守ってもらおうということはできないのか？」

「無理ね、もう、この世にはいないもの、あの人は」

「そうか・・・でも、見つからなかった場合は、それに見つかったも、そいつが弱かったら？」

「大丈夫よ、私には天使が誰か分かるから・・・弱かったら、仕方ないわ」

「仕方ないって、それでいいのか？」

「いいの、もう世界の崩壊は止まるかもしれない
今なんていった？止められる？なぜ？」

「じゃあ見つかったんだな！？」

秋野さんは頷いて俺を指差して言った。

「あなたよ」

へ？・・・一瞬、ぽかんとした。

「な、なんで？」

秋野さんは、

「あなたからは、私と同じ気配がするの。あなたが天使なら私を守れて、愛せる」

「俺が天使？冗談言うなよ、俺は人間だぜ？羽もないし、信じられない」

「そうよね・・・、自分が天使なんて信じられるものではないわ」

「だから、俺は天使なんかじゃない、信じられるか！！」

「それでも？」

そう言うと、秋野さんの背中からはっきりと白い美しい羽が見えた。

「あ・・・」

俺は言葉を失った。

そこに見えていたのは、秋野さんではなく、一人の天使だった。

秋野さんは、優しい笑みを浮かべて、

「これが本当の姿よ・・・」

正直、すごく可愛かった。

「すげー・・・」

彼女は元の姿に戻り、

「これで本当だとわかったでしょう？それに、天使じゃ・・・ても、あなたを・・・から」

「ん？なに？」

よく聞こえなかったので聞き返すと、何でもないわと言って、話を続けた。

「じゃあ、俺が天使だってことをどうやって証明するんだ？」

「それは、小悪魔と戦えば解るわ」

そういうと、秋野さんは籠に入った頭部がトカゲのようで、二足歩行、角があり、人間のような体つき生物を取り出した。

その気持ち悪さに、

「なんだこれ・・・？」

と言ってしまった。

「これは魔界の住人よ。この戦いで力が出なければ天使じゃないわ」
そう言うのと籠を開けた。

かちゃ・・・、秋野さんが籠を開く。

「まだ、まだ・・・！！」

その言葉を待たずに、小悪魔が飛び出してきた。

「くっ！」

俺は部活で使っている竹刀を取り出した。

「っ！！」

俺は力いっぱい小悪魔をたたいた。

が、しかし・・・はじかれました、きれいに。

「げー！！全然くらわねえ！」

爪が迫ってくる。

「ぐっ！」

胸を少し引つかかれてたじろいだ。

「くっそおおおおおおお！！」

もう駄目だ・・・そう思ったとき、身体の重さがなくなった。

「なんだこれは!？」

とても驚いた。しかしもっと驚いたのは竹刀が光り輝く日本刀になっていた。

「うわ!!」

小悪魔がまだ襲ってきた。

「これならいける!!」

その瞬間、小悪魔の身体を切ったはずだが、切れてない!?

「何で切れてないんだ!？」

そう叫んだ瞬間、相手の体がずれた。

「時間差・・・？」

鮮やかに切れていた。

トコトコ・・・、秋野さんが歩いてくる。

「やっぱりあなたが私を愛せる人・・・、天使・・・」

荒い息の俺に秋野さんが擦り寄ってきた。

「それにしても、あなたが1万年に一人の大天使のシャインエンジェルだったなんて」一瞬、意味がわからなかった。

「何それ、大天使??? シャインエンジェルって？」

俺が首を傾げて聞くと、

「普通の天使なら持っているものを状態変化させることは出来ないの」

「そうなん!?! 勝手に変わっただけだと思った」

そう言うと、

「状態変化は強さのイメージが影響して変化するの。あなたの場合日本刀が強さのイメージだったのね」

はあ、っと俺は納得したようなしないうなで聞いていた。

「もう一つは、」

っといって俺を見つめた。

「あなたには予知能力がある」

「はあ!?! 予知能力!?!」

俺は驚いた。

「たとえば・・・」

そう言うとき秋野さんは黙った。その時とつさに、

（あつ、右斜め45度からすばらしいビンタが来る、様な気がする）
と思ひしやがんだ。

予想どおりにすばらしいビンタが右斜め45度から来たがそれは空振りになった。

「あ、あれ？何でビンタが来ることが分かったんだろ？」

「それがもう一つの能力よ。今は人間の姿だけど、予知能力だけは使えるわ」

なんだかすごい話をしているがいきなり疲れが来てほとんどスルーだった。

「へー、なんかスゲーな・・・、俺」

もう疲れて何がなんだか……。そして、そこから記憶が途切れていた。

第二話（後書き）

どうだったでしょうか？

ごちゃごちゃでしたね（汗

もっとマシな内容にしたいと思うんですが・・・

次も読んでくださる人がいたら幸いと思い更新していきたいと思
います。

第三話（前書き）

はい、三話目です・・・。

こんな小説でも読んでくれている人がいてうれしいです。
その人たちのためにも頑張りたいと思います！

第三話

「ふあああ、なんか、途中から記憶がないぞ？どうやって帰ったんだ？」

朝起きるといつの間にか自分のベッドだった。

時計を見ようとした時、視界に飛び込んできたのは、

「秋野さん!？」

俺のとなりでピツタリくっついて寝ているパジャマ姿の秋野さんだった。

「うっ・・・」(スゲーかわいい・・・)

じゃなくて、

「何で秋野さんがここに!？」

秋野さんが眠たそうに起き上がり、

「昨日私があなたの家で同棲していい?って聞いたらいいよって言ったじゃない」

「マジ!?俺そんなこと言った!?母さんはOK出したの!？」
つと聞いたら、

「あなたが、行く所が無いらしいから頼むって言ってくれた」

「そうしたらOKが出たのか・・・」

秋野さんはコクリ、と頷いた。

「そうか、じゃあ仕方ないなー・・・」

秋野さんはうれしそうに微笑んだ。だめだ、俺は女にはあますぎる・

登校中

「なあ、そんなにくっつかなくても・・・」

秋野さんは恋人みたいにぴったりくっついて歩いていた。

「いいじゃない、別に・・・」

そのとき、

（あ、慶太が来る）

予知能力が働いた。

「あはよ・・・、ああ!？」

慶太は素でびっくりして大声を上げた。

「何で、秋野さんと恋人同士みたいになってんだよ!？」

そう言うのと、俺が否定する前に秋野さんが、

「みたいじゃなくて、恋人なの」

秋野さんは嬉しそう言った。

「えっ? いや、ちよっ!！」

そこへ・・・、

「おっはよ・・・!」

びっくりしすぎて言葉にならなかったようだ。

「何、あなた達そういう関係だったの?」

「なっ、ちが」

弁解の暇もなく、

「ま、そういうんなら、とやかく言わないけどね」

長閑と慶太は少し誤解をしたまま学校へ着いた。

教室の扉を開くと予知能力が働き・・・

（ん? 黒板消しが落ちてくるな）

上から降って来る黒板消しをキャッチした。

「おい、何で分かったんだ?」

不思議そうに慶太達に見つめられた。

「何となくね、ははは・・・」

キーンコンカンコン

授業が終わり部活のときに、

「私、剣道部のマネージャーになります」

突然秋野さんが変な事を言い出した。

「はい・・・?」

俺が聞き間違いかなど思い聞き返す。

「だから、私は剣道部のマネージャーになるの」

（秋野さんが剣道？）

「何でまた・・・」

そう言うとき秋野さんは頬を赤らめ、

「一緒に・・・居たいから」

俺はいつの間にかどきどきしていた。

「そうか、な、ならいいけど・・・」

そう答えると、先生に申し込みに言った。

数分後、

『ありがとうございます』

二人で声を合わせて教務室を出た。

秋野さんはとてもうれしそうに腕を組んできた。

「ふふふ、これであなと一緒に居られる・・・」

俺は、秋野さんを見て微笑んだ。

その日の帰り道・・・。

「ねえ、秋野さんの家ってどこなの？」

長閑が唐突に聞いてきた。

相変わらず俺にくっついていた秋野さんは長閑の質問に、

「北村君と同棲どうせいしてます」

「あの、いや、これは！」

『同棲————！？』

長閑と慶太が声を合わせて叫んだ。

「イヤー、思ってた以上にラブラブだな」

悔しそうに慶太が言った。

「あはは・・・」

なんとか誤魔化しその日は別れた。

「二人きりね」

と、秋野さんが顔を近づけてきた。

「ん、何、秋野さん？」

二人の息使いがわかる。

お互いの胸の高鳴りが聞こえる。

そのとき、

(?!、何か来る!)

異変に気づいた秋野さんも身構える。

暗闇から何かが現れた、って

「なんだ・・・、こいつは!!」

目の前に現れたのは、黒い羽、顔はイタチや狼をたして÷2したみたいで、

巨大な尻尾、強靱な爪があり、身体はイタチザメほどあった。

秋野さんがふるえて、

「あれは・・・、PADの作り出した魔獣、ガルギリアス!!」

そんな彼女を見た俺は、

「必ず守らなきゃ・・・!!!!」

恐怖を押し切って天使化した。

魔獣の口内から赤い灼熱の炎が見える。

その炎が俺へ・・・ぎゃー!!

「ぐ・・・、熱・・・くない?」

吐き出された炎は光のベールで防がれていた。

「これなら、いける!!」

ダンッと踏み込み、魔獣の頭を切り裂いた。

悲鳴を上げて怒り狂った魔獣が突っ込んでくる。

「動きがわかる!」

俺は突っ込んできた魔獣を避け光る日本刀で真っ二つにした。

真っ二つに斬れた魔獣は地面に落ち、やがて光になって消えた。

秋野さんはまだ少しふるえて俺の方を見た。

「はぁ、はぁ・・・。よかった、無事で」

俺がそう言うのと秋野さんは抱きついてきて、

「ありがとう」

といった。

「じゃ、帰りますか・・・」

第三話（後書き）

なんか、主人公最強ですね・・・
正直このままでいいのか！？と思ってきました・・・
四話あたりからもう少しマシな内容になっていけば・・・
とおもいます。

第四話（前書き）

どうもカレー紳士です・・・
なんと、お気に入り件数が増えていました！！
びっくりです・・・
これからもがんばります！！

第四話

ガチャ・・・ドアを開けて、

「ただいま、母さん」

俺が言うと続けて、

「ただいま帰りました、お母様」

そういつて、秋野さんも家に入った。

「ふふ、そんな固苦しくなくていいのよ」

と、母さんが言うのと、照れたように

「た、ただいま、お母さん」

そう、秋野さんが言った。

俺の部屋に來ると、

いきなり秋野さんが服を脱ぎ始めた。

「な！ちよっと！なにやってるんだ！？」

俺は目を隠していった。

「着替えてるの。どうしたの？」

秋野さんは綾〇〇イみたいな、静かな女の子だと思ったけどこんな
に大胆だなんて。

「あ、あの、男子の前でそういう事するって言うのは・・・」

「いいじゃない。好きな人の前だし」

「そういう問題じゃなくて・・・」

「着替え終わったわよ」

それから俺も着替えた、秋野さんは出てもらいましたよ？

「今日はもう遅いから寝よう」

と、布団へ入ると

ぎゅ・・・

いきなり秋野さんが抱きついてきた。

「な、何だよいきなり」

秋野さんは俺の胸に顔を埋めて、

「おやすみ・・・」

といってそのまま寝てしまった。

「ま、いっかな・・・」

俺も寝る事にした。

翌朝・・・。

「ん、ふああああ・・・」

眠い中をおきると、

「あれ？秋野さんが居ない？」

階段を下りてリビングへ行くと、

「目は覚めた？」

と、秋野さんが言ったのはいいのだが・・・、

「何でそんなかつこうしてるんだよ！？」

秋野さんの姿は、エプロンを着ていてお玉を持った・・・主婦の姿だった。

「あの、お母さんが新婚の練習しとけて」

「何やってんだよ！母さん！」

母さんはからかうように笑うと、

「もう、とぼけちゃって！結婚するんでしょ？」

「なっ！」

俺は秋野さんを見た。秋野さんは頬に手を当てて赤くなっていた。

「秋野さん、なんか言った？」

母さんが、

「何言ってるのよ、あなたが一昨日言ったんじゃない、俺の婚約者だって」

「えっ！？マジ！？」

秋野さんと母さんが同時に頷いた。と言うか、OK出す親もどうよ？！

「早くご飯食べないと遅れるわよ！」

と、母さんが言った。

「今日は私が作ったの」

と恥ずかしそうにご飯と味噌汁を出してきた。

一口食べると・・・、

「ん、おいしい」

秋野さんは俺の反応に満足だったのかとても嬉しそうだった。

「いちゃいちゃしてないで早く食べないと遅刻するわよ」

母さんがからかってきた。

「わ、わかってるよ!」

朝飯を食べてさっさと歯を磨き、登校。

秋野さんが俺にくっついて歩いていると、

「おう!綺麗な女連れてんじゃねえか」

と、ガラの悪い男が俺と秋野さんに言ってきた。

「なんか用ですか?」

そう聞くと、男は

「痛い目見たくないなら、その女をよこしな!」

そういつて刃物を取り出してきた。

「お断りします!」

「なめんなや、くそがきがぁ!」

その男が勢いよく切りつけてきた。

「あたるか!」

俺がその刃を避けて竹刀を取り出した。

「邪魔!」

破裂音のような音が鳴り響く。

美しい曲線を描いた竹刀は見事に男の脳天に直撃した。

気絶をした隙に走って学校に行った。

キンコンカンコン

「ふー、危なかったな・・・」

学校に付いた俺はため息を付いた。

「遅刻ぎりぎりね」

「違うよ、秋野さんがだよ」

「え・・・?」

秋野さんが赤くなってうつむいて、
「ありがとう」

小声で、しかしはっきりといった。
そんな秋野さんに見とれつつ、

「あ、ああ、無事でよかったよ」
といった。

後ろから麻野が、

「何かあったの？」

と、聞いてきた。

俺は、

「いや、何でもないよ」

俺は疲れたように答えた。

キンコンカーンコン・・・

「あ、チャイムだ」

といって麻野さんが席へ戻った。

く昼休みく

秋野さんが恥ずかしそうにお弁当を取り出した。

「これ、お弁当。うまく作れたかはわからないけど・・・」

赤くなりながら、かわいいお弁当箱を差し出してきた。

俺はうれしさいっぱいになった。

「ありがとう」

そのとき!!

「きやあああ!!」

「うわあああ!!」

朝、路上で絡んできた男が教室に乱入してきた。

「この教室に、俺を殴った奴がいるはずだ。出て来い!!」

(げっ! あいつは、朝に絡んできた奴!!)

「ん! そこかあ!!」

そう叫びながらクラスの人々を押しのけ、突っ込んできた!

「どうする？また気絶させちゃう？」

秋野さんが、いいところで・・・、というような顔で言っていた。
俺は少し考えて、

「いや、誘導しよう、ここじゃ人多すぎる」

俺は勢いよくドアから飛び出して、屋上へ走った。

（屋上）

「はあはあ・・・、こんなところでタイマンか？あの時は油断したが、今度はそうは行かんぞ！！」
ふうー。

「さあ、始めるか」

男は何だと？というように睨み付けてきた、いや、でも余裕ですし
！。

「このクソガキヤア！！」

男は勢いよく殴りかかってきた。

「おっとお！！はい、一発目空振りだな」

俺は予知能力があるのでらくらく避けます、さらに避けます。

「くそ！！何で避けられるんだよ！！」

（そろそろ、終わらせるか！！）

めんどくさくなった所で、

今日、二度目の破裂音。

「ぐ・・・あ・・・」

男はぐらりと倒れ、気絶した。

その後男は交番に連れて行かれた。

「大変だったわね」

秋野さんは心配そうに覗き込んできた。

「大丈夫だよ、それよりごめんな、せっかく作ってくれたのに」
そう謝ると、秋野さんはにっこり笑って、

「謝らなくてもいいわ、こうしているだけで幸せだから」

秋野さんはぴったりと寄り添ってきた。

「じゃあ、帰ろっか」

第四話（後書き）

今回は新婚シチュと不良から助けるといふ

ありがちなシチュエーションを入れてみました。

相変わらず主人公は最強ですね・・・。

少しはダメージを負わせるシチュエーションも取り入れていこうと思います。

第五話（前書き）

今回は少しエッチです。

でも、作者の表現力がなさすぎるので

そのシーンは想像（妄想？）におまかせします。

第五話

く帰り道く

夜道を歩いていると、

「今日は大変だったわね」

秋野さんは顔を覗き込みながら笑いかけてきた、たぶん。

「そうだなあ、まあいいじゃん？それなりに楽しかったし」

そう言っていると、

「邪魔が入っただけじゃない・・・」

秋野さん目を細めて悪態をついていた。

「まあ、確かにあのせいで秋野さんのお弁当食べれなかったし」

「まあいいじゃない」

秋野さんは優しく微笑んだ。

ガチャ・・・玄関のドアをあけた。

『ただいま、（お）母さん』

「はい、おかえりなさい」

母さんはいつもの優しさあふれる笑顔で迎えてくれた。

「あれ？母さん、ご飯は？」

そこにはいつも作ってあるはずの夕飯がなかった。

「あ、秋野さんどうしたの？」

秋野さんは突然抱きついてきて、

「私が作ってあげる」

その表情がとてもかわいく見えた。

「あ、ありがとう・・・」

俺が、秋野さんを見つめていると、

「あらあら、ラヴラヴねえ？」

からかうな・・・

「か、母さん・・・」

「じゃ、お風呂入ろ？」

「うん、じゃあ入ってくる」

俺がお風呂場に入ろうと脱ごうとすると、

秋野さんが入ってきた。

「な！な！なあ！？」

「何驚いてるの？」

秋野さんはキョトンとした顔で見つめてきた。

「いや、あの、俺・・・入るんだけど・・・」

おろおろしながら言うのと、

「いっしょに入るの、嫌？」

と、悲しそうな目で見てきた。

「あ、いやっ違、わかった！俺が悪かった！」

「じゃあいっしょに・・・」

秋野さんは嬉しそうに言うと言を脱ぎ始めた。

「ただし、タオル巻けよ？」

秋野さんはうなずいてタオルを巻いた。

入ったのはいいが・・・、

「あの、秋野さん？くっつきすぎだと思っただけど？」

「いいじゃない」

いいじゃないと言われても・・・、む、胸のふくらみが、腕に！！！！

「じゃ、俺からだ洗うから」

と、逃げるようにあがろうとすると、

「背中流してあげる」

と言ってあがってきた。

「あ、いいよそんなことまで・・・」

「いいじゃない、練習よ」

練習！？新婚の！？

「あ、秋野さん・・・？」

秋野さんは鼻歌交じりに背中を洗っている。

その表情を見てドキッと来た。

「はい終わり、次はあなたがして？」

「え！？は、はい？」

俺は驚いて聞き返した。

「はやくうゝ」（棒読み）

その瞬間、鼻血が噴き出した。

「はぁ……。大変だった」

風呂からあがって、ため息をついた。理性が、理性が！！

「フンフンフンフーン♪」

秋野さんはごきげんだ。

「今日はハンバーグだけど、それでもいい？」

「なに……。その新婚的な……」

「もう、そういう時は、お前が作るのだったら何でもいい、って言うてよ」

秋野さんが少し不満そうに言った、こんなキャラだったっけ？

「わかったよ……。ははは」

思わず笑うと、

「ふふふ……」

秋野さんも笑いかけてきた。

それから秋野さんが作った温かい夕食を食べて部屋へ戻った。

「いやー、美味しかったよ、ありがとう」

俺が、秋野さんにお礼を言う

「あ、ありがとう」

と、照れたように言った。

「じゃあ、寝ようか」

と俺は電気を消して、ベッドへ潜り込んだ。

秋野さんは、俺にくっつき

「おやすみなさい……」

と言って、すやすやと寝てしまった。

俺は、

「おやすみ」

といって眼を閉じた。

第五話（後書き）

最近投稿が遅れてきているような気がするのは気のせいでしょうか……？

一応目標は五日ほどが限度だろうなあ……とおもっています。

なるべく早く更新しようと思うので、これからもよろしくお願いいたします！！

第六話（前書き）

更新が少し遅くなりました…
そんなこんなで六話目です。
最近戦闘シーンがあまりなくなりましたね…
気をつけたいと思います。

第六話

（翌日）

チュンチュン、チュン

「ん、んん、ふぁ・・・あああああ」

朝、起きると、

「あれ、また秋野さん朝ごはん作ってるのかな？」
階段を下りると、

「誰もいない？」

（出かけたのかな？今日は土曜だしな…）

パンにジャムを塗って考えていると、

カチャ・・・

ドアが開く音がした。やけに早いお帰りだな。

「おかえ・・・」

そこにいたのは、秋野さんや母さんではなく、

「慶太に長閑、麻野まで・・・、どうしたんだ？」

そう、そこに立っていたのはその三人だった。

「お前こそ何してんだ？」

慶太が逆に聞いてきた。

「は？なに言ってるんだ？」

慶太の意味不明な質問にさらに「？」だったが・・・

「あのね・・・、あんた忘れたの？今日剣道の大会でしょ！」

イラついたように長閑がさげんだ。

俺はびっくりすると同時に、記憶が蘇よみがえって青ざめた。

「しまった！！今日は全国選抜の大会だ！！」

（集合は6時30分だったよな・・・。）

恐る恐る時計を見ると・・・。

「げえ！！もうこんな時間！！」

時計の針は6時12分を指していた。

（今から走っていけばなんとか・・・）

それから16分後・・・

「甲斐君・・・遅い・・・」

秋野さんが学校で待っていて、

「すみません、ぎりぎりに来てしまつて・・・」

俺がそう言うのとやっと来たかというように顧問の先生が見ていた。
横から、

「遅かつたわね・・・。なにしてたの？」

と、秋野さんが見つめてきた。

「いや、忘れてて寝坊した・・・」

それを聞くなり、

「あなたって結構忘れやすいのね」

秋野さんが俺につぶやいたとき、

「おい、早くバスに乗れ！時間ないぞ！」

と、先生が集合をかけた。

秋野さんは・・・当然俺の隣だった。

（あれ？でも何で寝ているのがわかっていはずなのに、起こしてくれなかったんだ？）

～大会会場～

「うわー、広いなあー！」

そう声を上げたのは応援に来た慶太だった。

「全国から観客とか来てるからな」

驚いている慶太に説明した。

「おい北村、控え室へ行け」

先生が抽選を終えてやってきた。

「じゃ、俺行くよ」

秋野さんは、無表情で

「がんばって・・・」

とだけ言っで見送ってくれた。

〽一回戦目〽

（一回戦目は大男かぁ・・・）

前に立っていたのは、身長二メートルくらいあるがっしりとしたやつだった。

（なんか一発でも大きいの食らったらヤバげだ・・・）

審判「はじめ!!」

審判の始めの合図とともに、大男が突っ込んできた。

「まあ、予想済みだがな!!」

大男が面を取りに来たところに胴をいれ、一本。

「なっ! こんなにあっけなく!!」

大男は俺に怒りにも似た血走った眼を向けてきた。

二本目の勝負の始めの合図が告げられた瞬間再び突っ込んできた。

予想済み、もとい

予知済み。

「はぁ!!」

籠手^{こて}をあっさり決め、二回戦目へ。

男には・・・、悪いことをしたなあ。

二回戦目・・・と思いきや、

「ど、どうしたの? 秋野さん、ここ控え室!!」

そう控え室に入ってきたのは、黒髪にきれいなストレートのかかった発育もよい

一見無口の同居人だった。

「あなたに、謝りたいことがあるの」

唐突^{どうとつ}に秋野さんはそんなことを言い始めた。

「何、謝りたいことって?」

俺が、心当たりがまったくないので聞いてみることに。

「朝、大変だったでしょ?」

その言葉と、自分の疑問が結びつく。

「ああ、それならもういいよ、間に合ったし」

俺がそう言っても秋野さんはすまなそうな顔をしていた。

（次の試合まであと四十分か・・・）

俺は思い切って理由を聞いてみることにした。

「でも、何で起こしてくれなかったんだ？」

秋野さんは、まじめな顔をして、

「実は・・・」

と、言ったところで秋野さんの頬が緩んだ。

「実は、その、あなたの寝顔が愛しくって、その、起こせなくて・・・」

は？と言うことは、何？俺が寝てて、秋野さんには愛しく見えて、起こせなかったと？

「本当にごめんなさい・・・」

と、必死に謝っている姿をいつまでも見ているわけにも行かないので、

「いいよ、さっきも言ったように間に合ったし」

「あなたって、とても優しい人・・・」

秋野さんの顔をじっと見つめている自分に気付いて、

「あ、ああ、そうかな？」

と、気恥ずかしくなってはぐらかした。

「あ、そろそろ時間だ、言ってくるよ」

試合時間が近づいてきたので行こうとしたら呼び止められた。

「あの、その、がんばって・・・」

「ああ、がんばるよ！」

そう言って控え室を後にした。

（二回戦目）

（二回戦目は・・・、なんか、怖いんですが!?!）

前に居たのは、痩せていて、ゆらゆら揺れている、不気味なやつだった。

(こんな痩せていて大丈夫なのか?)

「はじめ!!」

審判の始めの合図、とともに奴の竹刀が高速で振られた。

(!! やばい!!)

パン!!

すごい音とともに、強烈な衝撃が走った。

(ぐ、なんとか防いだけど、やばいな)

自分でも防ぐのがやっとだった。予知できるのに? いいや、予知できたら防げたんだ。

予知できない、今までの俺だったら、確実に一本いったな。

(さてどうするか)

〳〵応援席〳〵

「おお!? はええ!!」

沖野君がそう叫んだ。あ、ここからは少しだけ、秋野由香里の視点。気にしないで。

「でも、彼なら大丈夫。だって、私の婚約者だから」

「へえそうか・・・、はあああ!!」

(つい禁則事項を口にしてしまった・・・彼に迷惑がかかる)

「どういうことだ!? 婚約って!!」

(うるさい。この人は苦手)

「なあー、どういうことだよー!」

(・・・・・・ブチッ!!

!)

「少し・・・黙ってもらえないかしら? 一週間ぐらい」

そこに居た、沖野君を含め、みんなが凍り付いていた。

「・・・・・・はい」

〳〵甲斐視点〳〵

パン! パシン!

ものすごい音が耳をつむぐ。しかし、今の俺にはそんなのにかまっていられる暇は無かった。すごい勢いで打ち込まれる相手の一太刀ひとたちは受け流すので精一杯だった。

（なんて力だ、馬鹿じゃねえの？本当に同じ歳かよ？それにあんなに細いんだぜ？）

バシィン！！

（あの細い体のどこからあの力が湧いて来るのかね・・・、知りた
いもんだよ！）

そう思っている間に残り時間あとわずか！！

（しかたねえ、一か八か、カウンターを打ってみるか！！）
相手が振ったその瞬間、

（ここだ！！いけえ！！）

パアアアン！！

これが予想外に決まったんだ。この後、優勝はしたけど、ね。

バス車内へ

「それにしても凄かったわねー、最後のカウンター」

そんなことを帰りのバスの中、長閑がつぶやいた。

「そうだよなあー！」

と、慶太が食いついてきた。

「そんなことねえよ、ギリギリだったし」

「そんなことないよお、本当に凄かったもん、北村君」

あはは、と俺に笑いかける麻野。いや、でもなにより秋野さんの顔を見るだけでほっとした。

「でも、あなたは凄い、さすが、私の・・・」

ああ、かわいい。そんな秋野さんの笑顔を満喫していると、

「おい、甲斐！お前達の家の前だぞ！！」

慶太が家に着いたのをおしえてくれた。うちの学校のバスは大会のときは丁寧ていねいに家に送ってくれるのだ。

「おう、じゃあな」

遠ざかって行くバスに手を振り、家についた。

第六話（後書き）

六話です…剣道部に入っているということで
大会に出るという設定にしてみました。

主人公は剣道部ですが、作者は実は野球部でした。
わからないことだらけですが、頑張りたいと思います!!!

第七話（前書き）

更新遅くなって済みません。
なかなか書けませんでした…。
できるだけ早く更新したいです。

第七話

『ただいまー!!』

声をそろえて、帰宅した。

「あらあら、おかえり。試合どうだった？」

いつものように出迎えてくれている母さんに、ブイサインを出す。

「あらあ!! やったわねえ、じゃあ今日はお祝いね」

何がいい? 聞いてきた母さんに返答しようと考えていると、

「じゃあ、カラオケ・・・、行ってみたいです」

秋野さんがそう言った。

「聞いたことはあるけど、行ったことがないの」

「まあ、これといって無いし、いいんじゃないかな?」

俺がそう言いながら母さんを見ると、

「そうね、そうしましょうか」

にこりと笑った母さんにつられて俺と秋野さんも顔がほころんだ。

〽カラオケ店「happy style」

「ここがカラオケ・・・」

初めて入るカラオケに興奮している秋野さんを見るのもいいなあ、と見ていると、秋野さんが、

「これ、どうするの?」

俺に使い方がわからないといって機械の使い方聞いてきたので丁寧^{ていねい}に教えた。すると、

何かのイントロが聞こえてきた・・・はて? どこかで聴いたような・・・?

「ほくしをまわくせ、世界の真ん中で」

早速選んだのか、秋野さん。でも何だっけ? この曲。にしても、うまいな。

そうこうしているうちにサビが来た。

「生き残りたい、生き残りたい、まだ生きていたくくなる」

(ああ!!これマロスだ!)

なぜ、秋野さんがマクロス知ってるんだ?そう思っているうちに歌い終わった。

「どうだった?」

「すごくうまいわねえ、歌得意なのかしら?」

「確かにそっくりだったな・・・」

頬を赤らめてありがとうと言ってまた何かを入れ始めた。

「母さんいっちゃうわよ!!」

次は母さんか、何だろう?

秋野さんは手拍子を始めている。

「夜明けの来ない夜はないさ、あなたがポツリ言う」

瑠璃色のO球かよ!!って言うかそっくりだ!!

歌い終わったところには、盛り上がっていた。

「うまいですね、お母さんは」

まあね、というふふと笑う母さんを見ると自分の曲が流れてきた。

「ん、俺か」

俺は深く息を吸い、歌いだす。

「いつもと、同じ坂道の途中で」

そう、カOブタを!!

歌い終えた後、秋野さんや母さんに、

「あんたうまいのね」

「上手」

照れる俺をよそに、またなんかのイントロが聞こえてきた。

「私の、入れたの」

そう言って秋野さんはマイクを握る。

「Day by day うんざりだよ だから、堂々と断つちやう、君になりなよ」

ハOヒーーーー!!

なんやかんやですすんでいき、母さんは寝るし、秋野さんは、

「北村君、私たち、下の名前で呼び合わない？」

この様に、間違ってお酒を飲んだことにより本音が出ちゃってます。

「でも、みんなの前でそれは・・・」

「いいじゃないのお、べつにい」

酔ったことによりいつもより色っぽいというか、かわいいというか。

「まあいいか」

「あり・・・ガと・・・う・・・zzz」

秋野さんダウンと同時に母さんが復活した。

「ん、今何時？・・・帰りましょう・・・か」

母さんが覚醒しかけの頭をもたげながら支度をしている。

（帰宅）

（んー、秋野さん、着替えさせないとだけど、おこすのみな・・・）
そう悩んでいると、

「ん、ふぁ・・・ああぁ・・・」

いいタイミングでおきてくれた。

「さぁ、秋野さん？着替えて寝ような」

コクコクと頷く様子を見ると、酔いはさめているようだった。

「あっ・・・」

秋野さんは声をもらし、俺のほうを見た。

「名前で呼んでくれないの？」

秋野さんは少し目を潤ませこっちを見つめながらいつてきた・・・
覚えてたか、クソ・・・

「あーいや、ごめん、え、えっと、ゆ、由香里・・・」

「なに？甲斐君？」

なんか照れくさい呼び方をした後、着替えるようにもう一度いった。
俺は部屋から出たあと、秋野さんが着替え終わるのを待つ。

「いいわよ、甲斐君」

俺はこの、名前で呼び合うことが当分学校で無いように祈る・・・

無理だろうが。

「じゃあ、明日も早いし、寝るか」

第七話（後書き）

カラオケに来ました…もう無理やり名前で呼ばせました。
文章力がないのもっと努力していきたいです。

第八話（前書き）

更新遅くなって済みません。

なかなかアイデアが浮かばなかったんです…いいわけですね、すいません。

これからもっとがんばりますっ！

第八話

（翌日）

ドスン！！

そのとき、俺は腹部の衝撃とともにおきることとなった。

「いってえ！！な、なんだ！？」

見るとそこには、

「なにしてんだ？秋・・・じゃなかった、由香里」

俺の上に乗っていたのは由香里である。

「なになって、甲斐君を起こしたのにおきてこないから・・・」

いつもの無表情（俺には読み取れる）でいった。

「それで、人の上にダイブか？」

「だって、お母さんがこうしたほうがいいって」

母さんめ・・・

「ま、早く降りてくれ、着替えられんし、飯も食えん」

こくん、と、由香里はうなずいて降りてくれた。

俺はむくりと起き上がり着替えて階段を下りた。

「おはよう、母さん」

「おはよう、甲斐。変な声がしたけどどうしたの？」

あんたのせいでしょうが・・・

「ああ、由香里さんがね、上にね、ドスンとね」

母さんがチラッと由香里を見て、由香里はポッと赤くなった。

「もうやったの？」

俺はまたなんかたくらんでいたなと思った。

母さんが俺に笑いかけ、

「で、どうだった？」

「なにが？」

「女の子のか・ら・だ」

俺はよく感覚を思い出し、カァアと熱くなるのを感じた。

「どうだった？」

由香里が上目で聞いてきた。

「ど、どうって・・・」

俺は蚊の鳴く声でいった。

「や、やわらかかった・・・です」

由香里は赤くなったが、うれしそうだった。

「ほらほら、そこでストロベリってないで早く行きなさい」

「わ、わかってるよ、いってきますす！！」（ストロベリってるって、なに？）

「いってきます」

俺と由香里はいつものように家を出た。

由香里はいつもと同じように俺にぴったり張り付いている。

「相変わらず、仲いいなあー、羨ましいよ」

こんなことを朝からばやいている慶太を見ているとのんきでいいな、とか思う。

「うん、恋人同士、仲いいのあたりまえ」

由香里はあたりまえだというように答えた。

「あんたたちってさ、喧嘩したことないの？」

長閑が不思議そうな顔で聞いてきた。

「んー、無いな、一回も」

俺は記憶を振り返り、由香里との日常を思い出していた。

「無いわ、私たち、恋人だから」

長閑は啞然としていた。

「本当に、一回も？」

こくんと由香里がうなずいた。

「へー、凄いな。それで、したのか？ 甲斐」

慶太が俺にひそひそと聞いてきた。

「何をだよ？」

ニヤニヤとしている慶太に当然の疑問をぶつける。

「なについて、キスだよ、キス。したんだろ？」

いきなり何を言い出すんだ?! 馬鹿か?! こいつは!!!

「ばっ！！し、してねえ！！」

「えー？　なんでだよ、さつさとやればいいじゃん」

「そういう問題じゃねえ!!」

こんな口論をしているうちに由香里が、何の話？と入ってきてしまった。

「い、いや、なんでもない!!」

そう、
 といってまた長閑との話に夢中になっている。

「はあ・・・、おまえなあ、寿命が三年くらい縮んだ」

わりいわりい、
 と言つて笑う慶太……たまにウザイ。

なんやかんやで学校到着。

俺らは午前中の退屈な授業を終わり、飯を食べようとしていた。

「ん、やつと飯か」

「よう、一緒に食おうぜ」

慶太が俺と由香里を誘つてきた。

「ああ、いいぜ」

慶・長・麻『じ〜〜〜〜〜〜〜〜〜っ』

「はい、あーん・・・」

「あの、みんな見ているんだけど？」

俺らの（ほぼ由香里）のラヴラヴぶりにクラスのみんなからの視線が痛い！！

「いいじゃない、別に……」

駄目だ、ラヴモード全開の由香里には何を言ってもとまらない！

生徒A 「なんだよ……、うらやましいじゃねえかよ……」

生徒B 「どうせ俺なんかもてないんだ・・・」

生徒C「頭がおかしくなりそうだ……外へ……ガクッ」

なんか色々やばいが、俺も相当ピンチ！！

「あ、あのほらみんな辛そうですし・・・」

「私の作ったお弁当・・・嫌い？」

きた！俺の苦手なたぶん無意識な涙目攻撃！！

これをまともに受けた俺は、思考回路が爆発しました。

「わかった、やるよ、やりますよ！！」

「ほんと？じゃ、あゝん・・・」

「あ、あゝん・・・」

（すっげえはずかしい！！）

「おいしい？」

「お、おう・・・」

「なゝんか、浮いてるな、俺ら」

「そうねえ・・・、あつあつよねえ・・・」

ああ、慶太と長閑の冷ややかな視線がグサグサ来てる。

（放課後）

「よう、甲斐、一緒に帰ろうぜ」

そう言って慶太と長閑が声をかけてきた。

「おう、いいぜ。でも少し待っててくれ」

「何？呼び出しでもくらったの？」

長閑が珍しそうに聞いてくる。それはそうだ、由香里はいわゆる優等生なのだ。呼び出される事などめったなことではそうそう無い。

「いや、俺のマネジャーやってるからな、多分それ関係だろう」と、

「ごめんなさい、まった？」

うわさをすれば何とやら、だ。

「いや、全然。じゃ、いこうぜ」

歩いていると、ふと長閑がこんなことを聞いてきた。

「あんたたち寝るとき、どうしてるの？まさか、一緒には寝てないわよ、ねえ？」

「甲斐君とはいつも一緒に寝てるよ？」

ああ？今さらっとばらしましたよ？無垢な顔をした天使様が！！

「いっしょに寝てるー!?!」

「しかも今、甲斐のこと『甲斐君』ってよんだぞ!?!」
二人が騒いでいる中、この原因をつくった本人はキョトンとしっぱなしである。

「し、静まれ! 由香里も困ってるだろ!?!」

何とか静めようとしたが、

「おお! 甲斐まで『由香里』って呼んだぞ!」

しまった、うっかり・・・

そして何とか二人を落ち着かせて帰ってきた。

『ただいま!』

「お帰りなさい」

いつものように母さんが出迎えてくれる、とそこにいつもは見ない顔があった。

「おかえりっ!?! 甲斐君!?!」

第八話（後書き）

はい、新キャラですね・・・キャラクターをどんどん出してしまうと
出番が少なくなってしまうキャラもいるわけで・・・
もう少し配分を考えていきたいです。

第九話（前書き）

結構時間が空いてしまいました、すみません。
なんか謝ってばかりですね・・・。
謝ることが無くなるようにしたいですね。

第九話

「何でいるんだ？こんなところに」

前に立っていたのはいとこの古沢鈴ふるさわすずだった。

いまさらだが、母さんの名前は亜美あみだ。

「亜美さん、甲斐君に言ってくれなかったんですか？」

「忘れてたのよ。」

なんか、状況が飲み込めないのだが・・・。

そのとき、俺の袖をくいくいつと由香里が引っ張ってきた。

「ねえ、あれ誰？浮気？浮気なの？」

うわあ、普段じゃありえないくらい殺気立ってますよ？

「い、いやあれはだな・・・」

あれが説明しようとなると、鈴がお辞儀をして、

「甲斐君のいところで古沢鈴といいます。えっと、中学二年です」
すると由香里も向き直り、

「甲斐君の彼女でこの家に住まわせてもらっている秋野由香里です」

「えー！？甲斐君に彼女で来たの！？いがーい！」

「以外は余計だ・・・はあ、それより、なぜお前がここにいる？」

俺はため息をつき聞くと、

「えっとね、学校がね改築工事とかで、二週間休みになったの、それで、ちょうどママたちは旅行でいないから学校が始まるまで、お世話になることにしたの」

なるほど、学校もないし、旅行でいないから預かってもらおうってことだな？鈴ママめ……。まあ、由香里の誤解も解けたし、いいか。

「言おうと思って忘れてたのよねー」

「母さん、そういう大事なことは早く言おうよ・・・」

ごめんごめんと母さんは言っ

「じゃあ鈴ちゃん、いつもの部屋を使ってね」

「え？でも甲斐君の彼女さんがいるんじゃないや・・・？」

やばい、いっしょの部屋で寝泊りしているのがバレる・・・！

「いやねー、こっちの部屋にしなさいって言ったんだけど、甲斐の部屋がいいって言ってねー」

さらっとばらしますね！？あなたという人は！！

「腹減ったんだけど？」

気がつく俺たちはまだ玄関にいた。

「あ、そうね、忘れてたわ」

こうして何とか深くは追求されなすむだろう。

「由香里さんってお料理上手なんですね！！」

由香里の作った飯を食べながら鈴は絶賛していた。

「あ、ありがとうございます・・・」

由香里も照れくさそうにしていた。

「あゝあ、私もいつかこんな風に好きな人に美味しいご飯作ってあげたいなあ」

鈴は遠くを見るような感じでつぶやく。

「大丈夫よ、鈴ちゃんかわいいし、彼氏なんていくらでもつくれるわよ」

鈴はにぼーっと笑って、

「ありがとうございます！」

といって笑っていた。

「じゃ、俺寝るわ、明日早いし、なんでも学校全体でテストやるんだってさ」

「お昼いるの？」

母さんが小首を傾げて聞いてきた。

「ああ、部活があるしね」

そういつて部屋へ行こうとすると、

「ねえねえ、部活見に行っていない？」

鈴がきらきらと目を輝かしている。

「俺の部活か？」

「当然、そうだよ？」

あはっと鈴スマイルを向けてくる。

「まあ、見るだけならいいんじゃないか？部活見学ってことで俺がこう答えると、

「やったー！！」

といった、何がうれしいのやら喜んでいた。

「じゃ、おやすみ」

俺が言うにつづいて由香里が、

「おやすみなさい」

といった俺の部屋へ入ってきた。

「あんな気軽にいいの？」

布団に入るなり、由香里は疑問の念をぶつけてきた。

「さあ、ただあいつが駄々こねると明日部屋の掃除で一日つぶれるからなあ」

俺がさらっと言うと、由香里は、

「大変ね・・・」

といった、目を閉じてしまった。

「おやすみ、由香里」

俺も目を閉じる。

「おやすみなさい」

といって由香里が俺の胸に顔をうずめてきた。

そして、二人とも眠りについた。

（翌日）

ドタドタドタツ、ガチャ！！

なんだ、騒がしいな・・・。そう思いつつ、体を起こすと、ドスン！！

なにか逆の強い衝撃で押し倒された。

「いってえ・・・、またかよ、今度はなん・・・おお!？」

その乗っかってきた物、というか、奴を見ると鈴だった。

そこまでは、昨日の由香里と一緒にであるが、格好が違った。

「な、おまえっ!! なんつう格好してんだ!!」

「えへへ、亜美さんがこういう格好のほうがいいっていうんだもん」
その格好は、ネグリジェ。

「だからってそんな格好でのっかんな!!」

俺が必死で抗議していると、

「ん、なに・・・もう朝・・・あ・・・」

由香里がおきてしまった。最悪のタイミングだ。

「ねえ・・・、なにやってるの? 説明願がほしい・・・」

「あ、いや、これは!!」

ああ!! 凄い殺気!! 肌がぴりぴりします!!

「あ、おはようございます!! これはですね、亜美さんがこうすると甲斐君が喜ぶそうなので、やってみました!!」

由香里の殺気を知ってか知らずか、危険ワードを出しやがった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「由香里・・・?」

黙っている由香里におそるおそる声をかけると、

「負けない」

そう言ったかと思うと、服を脱ぎ始めた。

「いや、ちよっ、由香里早まるな!!」

「甲斐君が喜ぶのなら私もする」

「なんか意味分かんねえこといってる!!」

俺は必死で目をつぶってこらえる。あひい、胸が、胸が・・・!!

「ほら、由香里!! お弁当は!？」

俺は何とか離そうとした、したのだが、

「今日はもう作ってある、今は二度寝」

ああ、なぜこんなときに限って・・・

「あなた達——!! 今日早いんでしょ? 早くしないと遅れるわよ

ー?」

下から母さん、いや、すべての元凶が呼んでいる。

「あ、本当ね。じゃあ、起きなきゃ」

やっと離れて安心してると、些ちと細な疑問が生まれた。

「そういえばお前、学校の場所わかるのか?」

昨日学校に来るやら来ないやら話してたが、鈴は学校の場所は知らないはずだ。

「んーん、わからないよ?」

「じゃあどうやって来るんだ?」

まさかと、いやな予感がした。

「甲斐君と同行しまゝす!」

的中だった。

「あのなあ・・・。テストだって言っただろ?」

「だからあー、あたしも受けるの」

なにいつてんだこいつ、うわあ、目がマジだ。

「はあ・・・、わかった。ただしテストは受けなくていいから」

「なんで?」

きょんとしている。

「何でってお前、高校のテストだしおまえは部屋にいるだけ」

鈴はまだむうーとか言ってたが無視だ。

『いつてきます』

「はい、いつてらっしゃい。」

「おっす、甲斐、おはよ・・・およ?」

「あ、甲斐、おは・・・ん?」

向こうから慶太と長閑が来て不思議そうな顔をした。

「ああ、おはよう。えーっと、こいつはだな・・・」

説明しようとした瞬間、

「おはようございます!!! 甲斐君のいところで、古沢鈴といいます!」

『あ、お、おはようございます・・・』

慶太と長閑はおろおろしていた。ま、鈴のテンションは異常だから

な。

「しかし、おまえにもこんなかわいい、いところが居たんだな」

「ほんとかわいい」

「いやゝ先輩ほどじゃないです／＼／＼／」

打ち解けるの早いな。ところで、

「由香里、もしかして拗^すねてる？」

「そう・・・みえる？」

短い言葉を返してきただけで、ぷいっとそっぽをむいてしまった。

「いや、あれは事故だって・・・」

「んー？あ、ほら、あそこで夫婦喧嘩してるわよ？」

こら、長閑、余計な事いうな。

「んゝ、どれどれゝ？ありゃ本当だ、珍しい」

「あゝ、ほんとだゝ」

そこ、乗るな。

「由香里さんは今、今朝あたしが甲斐君にちよっかい出したから嫉妬してるんです」

「うるさい、あれは事故だ」

由香里はまだそっぽを向いたままである。

「んゝ、由香里、許してくれないかな？」

由香里はこっちを向いてじゃあ、と切り出した。

「じゃあ私のお願い聞いてくれる？」

俺は深く考えずうなずいた。

「じゃあ、キス・・・してくれたら許してあげる」

俺は顔が熱くなるのを感じた。横でおおっ！とかきゃー！とか生徒の声が聞こえたが、今はそれ所じゃない。

由香里は目を閉じ、薄く口を開けている、それにチョンツてなってる。

「いやっ！でもここ通学路だし、それに・・・」

「ん・・・」

ねだるように近づいて来る。

第九話（後書き）

今回は結構長めに書いてみました。
最後まで読んでもらったのなら幸いです。
これからもがんばります!!

第十話（前書き）

遅くなりましてすみません・・・

ぶっちゃけ、作者は高校生なので文章力もなく

アイデア力ありませんが、頑張っていきたいです!!

第十話

「あ、甲斐君こっちこっち!!」

俺が部室に着くともう二人で座っていた。

他の先輩方がニヤニヤしている。俺は無視して由香里と鈴の近くに座った。

「やっと甲斐君のかっこいい姿を見れるよ♪」
なぜ楽しそうなんだ。

「まあ、いいけどな、迷惑はかけんなよ?」

「うん、わかった」

腹が減ったので弁当をもらおうとすると、由香里は渡してくれない。悪い予感がした。

「私が食べさせるの」

あー、的中。遠慮せずにあーんとかやってくる。

「えっと、その」

ああ、断れない雰囲気。先輩はやし立てるし、鈴にいたっては写真を撮ろうとしている。

「・・・あーん」

ああああ、はずかしい。穴があったら入りたい。

「あの、由香里?もしかして、食べ終えるまでこれ?」

当たり前だというようにして、こくん、とうなずく。

「あー、勘弁してくれ、マジではずかしい」

由香里は残念といってやめてくれた。

パン!!

竹刀が叩きつけられる音の中、由香里と鈴は俺のことを見ていた。

(はあ、何がそんなに面白いんだろ?)

「甲斐君がんばって・・・」

「がんばれー！！彼女が見てるぞー！」

前が由香里、後が鈴、大会じゃあるまいし。

「じゃあ、少し休憩を取れ！」

顧問がそういつて俺が面をはずした瞬間、

「汗、拭くね？」

そういつて由香里が汗を拭いてくれた。

「あ、ああ、ありがとう」

パシャー！！ 突然のシャッター音。

「お、おい？何をやってるんだお前は？」

鈴が俺らのことを写真におさめていたのである。

「おい、なぜお前はカメラを持っているんだ？」

鈴はニコツと笑って、

「それはね・・・甲斐君と由香里さんのラブラブっぷりを撮るためよ！！」

はあ、何を胸張ってんだか、まあ・・・由香里は嬉しそうだから良いか・・・さて、いいのか、俺。

「がっはははははは！！よかったじゃねえか、甲斐！！」

先輩がおちよくってくる。この先輩嫌いなんだよな、無意味に後輩に嫌がらせするし。

「じゃあ、練習再開！！」

練習が再開した。げっ・・・あの先輩が相手かよ・・・。

「がんばって。あなたなら簡単」

「そうよそうよ！！やっちゃえやっちゃえ！！」

『甲斐ー！！頼んだぞー！！』

ああ、由香里や鈴はともかく、他の先輩や後輩同級生までもが・・・嫌われてんな。

「なんだよ、俺も応援しろよ」

ただ、本人が気づいてないのが救いだな。

「ま、いいか、じゃあ、遠慮なく行くぜ！！」

先輩が竹刀を振り下ろす。

「っ！」

パシン！！！！バキィ！！

二回の竹刀がぶつかる音、一回目は俺が先輩の竹刀をはじいた音。二回目は俺が先輩の胴をとった音。先輩や皆由香里以外はきよんとしてゐる。

「ん・・・？あ、竹刀折れた・・・」

しまった、いくら嫌いだとはいえ本気で叩いて折れるとは思わなかった。

「いってええええええ！！！！！！」

あ、痛がつてんの見て皆よつてきて大丈夫かって言ってる。顔ニヤついでるけど。

そんなに嫌いかく、俺もだけど。

「じゃあ、お先に失礼します」

俺と由香里は頭を下げ部室から出た。

「凄かったね」

まず声をかけてきたのが鈴だった。

「そうね、まさかあそこまであなたがするなんて・・・」

由香里がこつちを見ている、やばい、嫌われたかな？

「かっこいい、さすが甲斐君、私もあの先輩嫌いだったから」

あー、やっぱり。いつもセクハラみたいな事されてるしな。

帰り道

「んー、いい写真が取れた」

鈴はニコニコしながらデータを眺めていた。そこには朝の、キ、キスシーンもばっちり。

俺がため息をついた瞬間、

「キュウウウウウウウウウウ！！！！！！」

耳をつむぐような金切り声とともに轟音が頭上で鳴り響く。

「な、なに、なんなのよ!？」

唯一状況を把握していない鈴はパニックになっている。

「くそ、空中戦かよ……。てか、あれだな、鷹人間みたいだな」

「甲斐君……。気をつけてね……」

「なんで！？なんで冷静で入れるの！？」

パニックすぎ……。ってしょうがないか。

「すまん、帰ってから詳しく説明する」

そういつて俺は天使になる。

「甲斐……。君？」

鈴は上手く喋れないでいる。

「じゃあ、言ってくる」

「いってらっしゃい」

俺たちはそれだけ言って、俺は空へ上がった。

第十話（後書き）

もう何も言うことが・・・

あえて言うなら、こんな小説でも読んでくれている方々に

「ありがとうございます」とお礼を述べておきます。

本当にありがとうございます！！

第十一話（前書き）

すみません、遅くなりました。
最近パソコンする暇が：はい、いいわけですね。
なるべく週一ぐらいには投稿したいとおもいます。

第十一話

轟音が響く。

「ぐっ!! 爪が硬そうだし!! そして何より、速い!!」

奴は比べ物にならないくらい速い、さすが鷹だな。こっちはまだ不慣れだって言うのに。しかも日本刀なしかよ。折れたしな、あんな奴相手に折るんじゃないかった・・・。

「キュウウルルルルルル!!」

金切り声とともに相手が突っ込んでくる。そのとき、血が噴き出した。

「うあ、ああああ・・・」

俺の肩が深くえぐれていた、痛みで上手く呼吸ができない。

「はあ、はあ、はあ、くっそ・・・!!」

再び高速で迫ってきた。

「甲斐君!!」

声のする方を向くと、鉄パイプを持った由香里が来ていた。

「受け取って!!」

ああ、あ、何泣きそうな顔になってるんだよ・・・。俺はまだ死なないよ・・・。

俺は鉄パイプを受け取る。その瞬間日本刀に変わる・・・棒なら何でもいいのか?

「これで、これでええええ!!」

俺は叫んでいた。そいつを真つ二つにするために。

ズパァ・・・そんな擬音だったと思う。

起死回生の一太刀は爪を切り裂き、体を二つに分けた。

「終わった・・・のか?」

ズキン!!

気が抜けた瞬間焼け付くような鋭い痛みが走る。

「はは、速く帰らないと、死ぬな・・・」

横では由香里の声が聞こえる。

「大丈夫だ、家に・・・帰ろう・・・」

ドサァ・・・

俺は半分墮ちるようにして下に降りた。

帰宅

「ただ・・・いま・・・」

「大丈夫！？しっかりしてよ！！」

「甲斐君！！甲斐君！！！！」

ああゝあ、俺は最低だな・・・。鈴と由香里を泣かすなんて、しっかりしなきゃな。

「まあまあまあ！！！！どうしたの！？その傷！！」

母さんは・・・驚いているけど、なんか違うな？もっとう、失神してもいいような・・・。

「甲斐！今から治すからね！！」

治す・・・？何を言ってるんだ？できるわけじゃないか。

そう思っていたのだが・・・。母さんは天使化した。

「えっ・・・？な、なんで？」

俺より先に鈴が驚いた。

「今まで隠していたけれど、私たちは天使なのよ・・・」

母さんは淡々と言う。まあ、息子の俺が天使なら、母さんが天使なのも当たり前か？

「さあ、甲斐。傷口を見せなさい」

俺は傷口を見せる。由香里と鈴は目を伏せている。

母さんが手をかざすと、傷が見る見るうちに治っていった。治るとこキモッ！！

「ごめんね、甲斐。傷口が深すぎて跡が残っちゃうの・・・」

母さんは申し訳なさそうにいった。そんな顔しないでくれ・・・。

「いいよ、別に・・・、治っただけでもありがたい」

由香里は安堵感から泣き出すし、鈴は目を丸くしている。

「ああ、鈴ちゃん？ 詳しいことは甲斐と秋野さんに聞いて？」
われに返った鈴は俺を引っ張るように部屋へ引き込んだ。

ここ最近の出来事を説明した。後、俺も始めて知ったことだが、天使には種類があり、

シャインエンジェルは純粋さと守る力を司り、由香里はハートエンジェル、愛を司るのだそうだ。俺の母さんはディアンケト、慈しむ心を司るらしい。ほかには、悪の心を司るダークエンジェル（堕天使）や、悲しみを司るバンシーや、死を司るタナトスがいる。

「じゃあ、じゃあ！！ 由香里さんと甲斐君と亜美さんのほかにも、天使はいるんですね！？」

由香里はこくりとうなずく。

「じゃあ安心じゃないですか！」

明るく言う鈴に由香里は首を横に振る。

「そうも行かない、必ず味方とは限らない。敵である可能性もある。推測だと、7割が敵」

鈴は押し黙っていた。

「まあ、何はともあれ俺は無事なんだ。もしも俺や由香里のやることに不満があるならかかって来たってんだ、全力で叩き切ってやるから」

「そう・・・そうだよね、甲斐君、強いもんね！！ 彼女を一人にさせちゃ駄目だよ？」

鈴は元気を取り戻していた。

「ああ、絶対一人になんかさせるもんか」

「甲斐君・・・」

由香里は嬉しそうに俺の名前をつぶやいた。

「じゃあ、私寝るね・・・おやすみ、素敵なカップルさん」
そういつて部屋から出て行った。

「じゃ、俺らも寝るか」

「うん・・・」

俺たちもベッドにもぐりこんだ。すると突然、

「ゆ、由香里!？」

足と腕を巻きつけてきたのだ。やばい、密着しすぎて体のラインがはつきりとわかる!!

「甲斐君、おやすみ」

そういつて由香里は顔を近づけてきた。

「あ、由香里! まって、ちょっと」

言葉は最後まで続かなかった。俺の唇が由香里の唇で塞がれたから。
「んっ、ちゅっちゅう・・・ちゅるっ、ぷあ・・・んふ・・・おやすみのキス」

「ば、ばか・・・、おやすみのキスで舌入れる奴がいるかよ・・・」
そう、由香里は大胆にも俺に舌を入れてきたのである。

「いいの、おやすみなさい」

「・・・ああ、おやすみ」

由香里は再度、俺に抱きつき、寝息を立て始めた。

「はあ、なんだかな・・・」

俺はそう呟いてから目を閉じた。

第十一話（後書き）

主人公初の負傷です。

やっぱり、最強設定だけじゃダメかなーと思ったので・・・。
ちなみに、次のネタは考えてません！！

対等な幸せ（前書き）

はい、いつもとタイトルが違いますね。

番外編を書いてみようかなーと思っただんです・・・。

続きが思いつかないだけなんですけどね・・・すみません。

対等な幸せ

えー、どうも、北村甲斐です。

今からする話はだいたい約三年くらい前の出来事のはずなのですが何故かぼんやりとしか思い出せません。

しかし今からするお話は、俺にとって、とても特別な出来事のお話です。

約三年前

「なあ、甲斐・・・なんて言ったら良いかわかんないけど・・・さ、仕方なかったんじゃないか？」

そう声を掛けてきたのは慶太だ。

「でも、俺は友達を守れなかったんだ・・・」

俺はこのころ傷心しきっていた・・・というよりも罪悪感が強かった。

あ、全然話の流れが読めませんでしたよね？すみません。

このときの俺は一人の友達を目の前で事故で亡くしたんです。

それで、目の前にいたのに、目の前で轢かれたのに、なんで助けられなかったんだと、自分を責めていたんです。

「そんなこと言っちゃってなお前、たしかにあいつが死んだのは悲しいし、事実だ。でも、お前のせいじゃない」

この時はみんなが励ましてくれたが、とてもじゃないが笑えなかった。

「でも、俺がもっと早く気づいて、飛び込んでいれば助かったかも

しれないんだぞ!？」

「それでお前も死んだら、元も子もねえじゃねえか!!」

「でも、それでも!!」

俺はその時は割り切れないでいた。

「お前も死んだら、悲しむ人が増えるんだ!そこをもうちょっと考えろ!」

「.....」

慶太の言葉は俺の胸に深く突き刺さった気がした。

「じゃあ、俺こっちだから」

そう言っただけで別れて行ってしまったが、俺は何も言わなかった。

俺は公園で慶太に言われたことを考えていた。

” お前も死んだら、悲しむ人が増えるんだ!”

「なんでだろうな・・・こんなに胸が痛むなんて・・・」

俺は、本当にあいつを助けられなかったのか?という疑問と、なぜだかわからないが、生きていることへの価値を考えていた。

「あいつは、何で死んだんだろうな・・・いいやつだったのに・・・。いい奴だったから悲しんでくれる人も多いのかな?俺はそんなやつを、なんで助けられなかったのかな・・・」

俺は今日言われたことの他にも慶太に言われたことを思い出していた。

” お前はあいつがい生きれなかった分までしっかり生きればいいじゃないか”

「しっかり生きろ・・・か」

そんなことを考えていると、一人の女の子が・・・俺と同じぐらいの年頃の人が立っていた。暗くて顔は見えなかった。

「あの、だれですか?」

俺が聞くと女の子は少し考えるそぶりを見せながら口を開き、

「いない・・・」

といって黙ってしまった。

「あの、なんで俺のことみてるの？」

沈黙が耐えきれなくなり思い切って話しかけてみた。

「・・・あなた、悲しそうだったから」

「ああ、気にしないでくれ・・・ただ考え込んでただけだから・・・」

「・・・そう」

また会話が途切れたしまった。

「よかったら、話してくれない？」

なんと沈黙を破ったのは女の子だった。

「あ、ああ、まあ、色々あってな・・・」

俺はなぜか彼女に今日考えていたことなどを話していた。

「それでさ、なんで生きているのかな・・・って」

俺はなんか自殺希望者みたいなことを言っていた。

しかし彼女は無表情のまま口だけを開き、俺に言ってきた。

「それは、生きていることを証明したいからだと思う・・・」

「え・・・？」

俺は彼女の一言に思わず声を上げてしまった。しかし、彼女は続ける。

「自分が生きていることの証明・・・笑って、泣いて、楽しんだり、怒ったり・・・そのすべてが

その人が生きていることの証明。だからそうやって自分が生きていることをアピールしている」

彼女が何を言っているのか、その時の俺には分からなかった。

しかし、聞き流す気にはなぜかならなかった。

「そして、その証明が友情、愛、絆になっていく・・・。人はみんな悩みを持っているが

悩みの大きさは違う。最悪だと思う人もいればそうとも思わない人もいる。中には、死にたい・・・

そんな声もよく聞いた・・・。あなたはどうか？」

「俺は・・・」

すぐには答えられなかった。

「俺は・・・今はとても最悪な気分だ・・・」

罪悪感、悲しみといったことからそんな言葉が漏れていた。

「だいじょうぶ・・・」

彼女は背を向け俺に向けて生涯忘れられないであろう言葉を残した。

「どんな人にも、対等に幸せは来てくれるわ」

そう言って彼女は闇へ消えた。

回想はここで終わりです、あのとき、あの言葉がなかったら今の俺はないと思います。

「ねえ、なんでぼーっとしてるの？」

そんな俺は今由香里と街を歩いている。

「悪い悪い、ちょっとな」

俺はそう言ってごまかした。

「あ・・・」

不意に由香里が小さく声を上げた。

由香里の視線をたどったところには電気屋のテレビがあり、自殺に関するニュースがやっていた。

「遺書には幸せが来ない、絶望しかないと書かれていた、か・・・」
俺はあの女の子のセリフを思い返していた。

そのとき由香里が口を開き

「どんな人にも、対等に幸せは来るのに・・・」

俺が心の中でリピートしていたのと同じことを言った。

「え？」

俺は驚いて声を上げてしまったが由香里には気付かれていないようだった。

（それにしてもさっき由香里が言ったこと・・・あの時の女の子は・・・）

「甲斐君、はやく・・・」

俺は由香里を見てかぶりを振った。

（まさか・・・な）

「ああ、わかったからまってくれ」

彼女が言った言葉は心の中にいつも残っている。

そして、そのような世界にするために俺も頑張らなきゃ！！

対等な幸せ（後書き）

どうも、今回は甲斐の過去について執筆してみました。

突然思いついたことなので煮詰まっではいませんが甲斐の悲しい過去に触れられるように頑張りましたのでよろしくお願いいたします！

第十二話（前書き）

更新遅くなり申し訳ありません。

頑張っているんですけどね・・・アイディアが出ないんですよなかなか

はい、いいわけですね。

第十二話

翌日

チュン、チュンチュン、鳥が鳴いている。

「ん・・・？朝、か」

俺が体を起こそうとした、したんだけど、

「甲斐君、起きてー」（棒読み）
ドスン！！

「どあふおお！？」

またか、最近こんななんばっかだな・・・はあ。
この声と感触は・・・由香里だな。

「由香里、分かった、起きるからどいてくれ」

俺がそう言うのと、唇にやわらかいものが押し当てられた。

「んっ・・・、おい、朝からそれはないぞ？」

「もう、おはようのキス・・・」

はあ、この笑顔を見ると何も言えなくなる自分が情けない。そこ、
マジで情けないと思わない。

「いや、それはうれしいけど、そろそろ起きなきゃばい時間だし、
な？」

そういうと由香里は素直にどいてくれた。

「じゃ、もう一回、ちゅううう・・・」

おい、長いつて！息が！！

そのとき・・・がちゃ！！

「おはよー甲斐く・・・およよ？」
なんていうグッドタイミング！！！！

「失礼！！ゆっくりしてね！」

おい！これはって、もういねえ。

「あの、ほんと下に行こう・・・」

そういつて俺は由香里と階段を下りた。

「あ、甲斐早かったのね、キスしてるって聞いたから長くなるかと思っただのに」

あー、朝からからかうのはやめてくれ。

「はい、甲斐君、朝ごはん」

鈴はニヤニヤしながら朝ごはんを出した。

俺は気づかないふりをしてさっさと食べ終えた。

『行って来まーす』

俺と由香里は、というより由香里は俺と腕を組んで登校する。もう日常風景だ。

「よう、おはよう、甲斐」

「おはよう、今日も熱々ねえ」

いつもの二人が来た、お前ら付き合えよ、仲よさそうだし。

「おう、そうかい。そういえばちよつと竹刀が折れたんでな、俺はよる所がある」

そういつて先に行こうとすると、

『面白そうじゃん（ねえ）』

「・・・ついて来るのはかまわないけど、面白くないぞ？」

それでも二人はまあまあといつてついてきた。

「んー、もう少し、握りやすいしっくり来るのはないかな？」

俺は店で竹刀を選んでいた。日本刀に変えれば関係ないけどね。いや、多少はあるのか？

「甲斐、これなんだ？」

「ああ、それは籠手だ、手にはめるやつ」

慶太は、おおーとか言っている。何が楽しいのかね。

「ねーねー甲斐ー、これなんかどうよ!？」

長閑が一本の竹刀を手をしている。

「お、これはしっくりくるな、これにするか・・・」

俺はレジに向かった。

「やあ、ありがとう・・・、おや？彼女さんかい？」

この店のおっちゃんは見知った顔で気前がいい。

「ええ、まあ」

「そうかい、じゃあ特別サービス、二割引だ!!」

といってサービスしてくれた、ありがたい、二割もまけて大丈夫か？
店から出ると、

ドン!

由香里が正面から来たガラスの悪い男にぶつかってしまった。

「おい、てめえ!! ちゃんと前見て歩け!!」

由香里はビクツとして動けず俺の腕にしがみついている。

「謝ったらどうだてめえ!!」

「その辺で勘弁してくれないですか?」

見るに絶えかねた俺は相手に問いかけた。

「なんだてめえ? お前の女か? こいつはよお?」

男が由香里の肩を掴もうとする。その瞬間男は外に吹っ飛んでいた。
なぜかって?

俺が蹴ったに決まってるじゃん。

「ごほっげほっ、てめえ!!」

頭に血が上ったらしいな。叫んで殴りかかってきた。

「長閑、慶太、由香里を頼んだ。あと、竹刀も」

また折りたくないしね。

「汚い手で触るな!!」

俺は北〇の拳のセリフを吐き、

ドゴォ・・・

うん、いい音立ててみぞおちにパンチが入った。

「ぐ・・・おぉおぉお・・・」

男は唸っている。

「おっしゃ!! 今のうちに逃げるぞ!!」

俺たちは走り出した。

学校到着

「いやー、お前って強いなあー!!」

「ほんと、助かったわー、一事はどうなることかと思ったわ
学校に着くなりこんなことを話していた。」

「そんなことねえよ、それより、由香里大丈夫か?」

由香里はこくと頷き、キスしてきた。

「うおい!? 皆の前でそういうことはやめろって!」

麻野は顔を真っ赤にしてうつむいてるし、慶太は、やれ! もっとやれ! と進めるし長閑にいたっては、

「いやー、あんたは幸せ者ねえ・・・」

なんていつている。からかうな。

「まあ、なんだ、その、またいつぞやの時みたいに攻め込んでこなけりゃいいがな」

「でも、あなたなら大丈夫」

由香里は微笑を浮かべながらそう言った。

「まあ・・・、何にもないことを祈るよ」

午後の授業も終了して、部活に向かおうとしたそのとき

生徒A「おい! 甲斐、お前に会いたいって言う恐い奴が来てるぞ!
!」

大声で駆け込んできた一人の生徒が必死の形相で用件を伝えてきた。

「お、おい、どうするんだ、甲斐!」

慶太があたふたしながら聞いてくる。

「はぁー、行くしかねえだろ? これは・・・」

「はわわわわぁー!? あ、あの大丈夫!」

心配そうに麻野が見上げてくる。

「大丈夫よ、こいつ強いから」

俺が台詞を言う前に長閑に割り込まれてしまった。

「じゃ、じゃあ、いつてくるな」

「気を付けてね?」

由香里がなんか心配そうな目で見てくる、うれしいね。

「まかせとけ!」

俺はそう言って教室を飛び出していった。

第十二話（後書き）

はい、おわりです、閉店ガラガラ・・・古いですね。

また同じような展開ですみませんほんとに・・・。

皆さんは北〇の拳知ってますか？

もう、ラ〇ウの死に方が感動で・・・関係ないですね、はい。

次回はもう少し早めに更新したいと思います。

第十三話（前書き）

えー、十三話目です。

そろそろ日常的なことも入れていききたいなーと思います。

第十三話

校門前

「はあはあ、ふう。さあ、お望みどうり来てやったぜ？」
そのとき、俺は目の前の男とにらめっこしていた。

「てめえ、朝はよくもやってくれたな」
そっちが余計なことをしたんだろ。

「いや、いきなりだったのは謝りますよ」

俺はできるだけ戦いは避けたい、というか、キスした時ほどじゃないけど人多いな。

こら、お前ら勉強どうした！特に三年生！！

「ほー、じゃあ悪かったと認めるんだな？」

なにやら男が不敵な笑みを浮かべている。

「ええ、そこは認めます」

刺激しないように、刺激しないように。

「じゃあ、お前と居た女を出せ」

「なぜですか？」

「俺の女にするからに決まっているだろう？」

「んー？ナニヲイツテラッシャルンダ？コイツハ？」

「それはできませんよー」

「なんだ？悪かったの認めるんだろ？」

「（ブチ）ええ、認めますが出来ることとできないことがあるんですよ？」

「あんない女お前にはもったいねえんだよ！！」

「（ブチブチブチ！！）こっちが悪いの認めたからさっさと帰りやがれデス」

おっと、口調がおかしくな

「つべこべ言わずにさっさと連れてこいや！！」

「（ブッチーン！！）てめーをこれからぶっ飛ばすので覚悟しやがれでございます」

あー、もう我慢ならん。殺す、こいつを殺す。

「んだとー！てめーがぶっ飛ばされてーか！！」

殴りかかってきた、短気な奴だ。そしてやられ役のセリフをありがとう！

「甲斐、避ける！！」

突然声がした。声の主は慶太だ、避ける？はて、またなぜ？

「よいしょと」

俺は一応斜め後ろに避ける。

「で、何で避けさせた？」

「馬鹿かお前、このままだとこの前の事件も合わせて、停学になるぞ？」

ん・・・？停学になる？それ・・・やばくね？

「わ、わかった。何とか避けて先生が来るのを待つか」

俺が、相手を見るとまだ睨んでいた。

「えーっと、さっきはすいません」

「お、なんだ、いきなり素直じゃねえか。俺に勝てえねとわかったか？」

ああ、めんどくせえ。

「え、ええ、俺はあなたには勝てません」

「（ボソボソ）おい、甲斐、青筋青筋」

「だったら、女をさっさと連れてこいや」

「できませんったら」

まだ言ってるのか・・・しつこい。

「だが、もらうとしても無表情で人形みたいだったな」

勝手に話を進めんな・・・。

「やっぱり、気持ち悪いからいらねえわ、その代りお前を殴らせろや！！」

ぶちーーーーーーーーーん！！

（由香里を・・・気持ち悪いと言ったか・・・？殺す。今度こそ、殺す。）

「お？なんだ？こっちに歩いて来ると言うことは、殴られにk「死ね！！」

ゴキヤア！！

「うわ、甲斐容赦しねえな・・・おまえ」

「おい、もう由香里の悪口言うんじゃねえぞ・・・？」

男は真っ青になって無言でこくこくと頷いている。

帰宅

「はあ、疲れたあ」

俺は風呂に入りながらそんなことをぼやいていた。

あの後どうなったかというところ、他の生徒や由香里たちの証言で嚴重注意だけで済んだ。

「なんか最近、疲れることばっかだな」

（考えても見れば、鈴が来て、正体がばれ、あとは・・・）
キスをしたのを思い出し、さっさと風呂を出た。

「甲斐君、今日なんかあった？」

飯をみんなで食べているとき、唐突に鈴が聞いてきた。

「まあ、ちょっと柄の悪い男に捕まったただだよ」

「ええ！！大丈夫だった!？」

「ああ、大丈夫だよ」

「でも、あなたがあそこまで感情的になるのは珍しい」
ぎくっ!!

「いやまあ、それは・・・えっと・・・」

お前だからなんて言えるか!!

「（ボソボソ）ん？もしかして・・・由香里さんだから、とか？」

Oh!？スズニハオミトウシデスカ？

「（ボソボソ）あ、いや、うん、そうだ悪いか!？」

そういうと鈴はニッコリ笑って、

「（ボソボソ）素敵だと思うよ？」

はあ、なんだかなあ。

「ねえ、おしえて、なぜ？」

う、顔近い。

「え、えっと、お前だからだよ・・・」

結局押されて白状をした。

「今、私だからって・・・」

「何度も言わせんな、お前だからちよっと取り乱したんだ」

由香里は座りなおして、真っ赤になってうつむいていた、ああ、はずかしい。

翌日

チュン、チュンチュン

ああ、いつもの朝だ、いたって普通の朝だ。

「ん、んんん・・・そろそろ、起きなきゃな・・・」

俺が体を起こそうとしたそのとき、

「やあーーーーー」（棒読み）

「とおーーーーー!!」

どすん!どすん!!

俺の体に天使と、いとこの体が降ってきた・・・これで何回目だよ・・・。

「あ、あのかな・・・ボディプレスくらうと痛いからやめてって・・・」

「朝だよ!!起きてー!!」

鈴、ガン無視か!!

「あなたは丈夫」

「由香里・・・俺はもろいのですよ?」

「??」

ああ、何で?っていう顔しないでください・・・。

「分かった起きる、起きるから・・・」

「じゃあ、おはようのk「はいはい、人前ではやめような!!」あぶねー、何とか阻止成功!

「仕方ない・・・さんねん」

由香里は残念そうに鈴と下に下りて言った。

「・・・マジで起きなきゃな」

着替えて、下へ降り飯を食べ、歯を磨き、

『行ってくるーす』

「はい、いつてらっしゃい、今日は早く帰ってくるのよ」

「ん? わかった」

しばらく歩くと、いつものようにいつものメンバーに会った。

「よう!! おはよう、新婚さん」

「お前の口を縫ってやろうか?」

「はは、冗談だよ」

慶太としゃべっていると、長閑が突っついてきた。

「ねえ、なんか少し由香里元氣ないじゃない? 喧嘩した?」

そういわれてみれば、あんまりしゃべんないな、

「どうかしたのか? 由香里」

由香里は俺を見上げて、ボソッと

「足りない・・・」

つとあった。

「ん? 足りないって、何が足りないんだ?」

「・・・甲斐君分」

「ん? なんだそれ?」

「簡単に言うとなあなたの愛情成分」

いきなり何を言い出すんだ、この無表情娘は。

「俺は十分愛してると思うんだけどな?」

俺は考えるようにいうと、

「あんた、負担掛けてんじゃないの?」

「そうだぞ! 秋野さんがかわいそうだぞ!!」

ええい、だまれ!! といいたいが、負担はかけっぱなしだしな・・・

。

「あの、俺が何をしたかは、あまりわかんないけど、ごめん」

「・・・朝」

「え？」

「朝、おはようのチューしてくれなかった」

「ぶはっ！！げほげほっ！！」

な、何を言い出すんだ！！しかも人前で！！

「あれがなかったら、甲斐君分が不足して元気でない・・・」

「いや、あれは鈴もいるし、俺は健全な高校生でして・・・」

「ああ！！分かるぞ、甲斐！！下のほうに血液g「黙れ！」ゴキイ！！」

ああ、余計なことを言おうとするから長閑が痛そうなパンチを・・・
「えっと、それ以外にできることない？その、謎な成分補給すること」

「・・・キス・・・」

「・・・」

「だ、駄目・・・？」

や、やや！？そのうるうるの目つきはいかん！！

「だ、駄目だ、人前だからな・・・まあ・・・こっちこい」

少し離れていたので呼び寄せた。

「甲斐k「これでかんべんな？」

そう言いつつ由香里を抱きしめた。

「・・・うん」

「はぁ・・・熱いなぁ・・・」

「そうねえ・・・校門の前で堂々とねえ・・・」

「おい・・・お前ら、抱き合っているとこ悪いが、遅刻するぞ？」

慶太の一言で我に帰った。

「うわあああ、キスの時ほどじゃないけど、恥ずかしいしヤバイ！
！時間が！！」

「んゝ、もうちょっとだけ・・・」

「由香里！そんなこといってないで早く行くぞ！！」

第十三話（後書き）

（予告）

次回、Last Angel

めぐってきました甲斐の誕生日

しかし楽しいはずの誕生日が災難なこと？

家族も増える予定の次回を乞うご期待！！

っという妄想が蔓延はびこりました。

ちなみに予告どおりにしたいと思います。

第十四話（前書き）

おはこんばんちわー！！

古いですね（笑）

十四話目です、はじまります！
レディー・ゴー！

第十四話

帰り道

「あ、今日甲斐の家、啓太と瑠璃と行くから」

長閑が喋っているときにそんなことを言い出した。

「別にいいが、なんで？」

長閑は呆れたように、由香里はキョトンとしている。

「なにかあるの？」

由香里は長閑の顔を見て訊いた。

「今日はね甲斐の誕生日なの、だからみんなでお祝いしようと思っ
てね」

ああ、そういうばそうだった。今日、10月9日は俺の誕生日だった
つけ。

「ああ、そういうことだからまたお前の家だな！！」

啓太たちがそう言っていたん帰って行った。

「甲斐君」

「ん？なんだ？」

「甲斐君に何かプレゼントするために、買い物してくる」

うわ、何この可愛い生き物！

「うんわかった。でも気をつけろよ・・・なんならおれも・・・」

「プレゼントが何か分かったら面白くないでしょ？」

ま、まあそうだけど・・・

「わかった、でも何かあったらすぐ帰って来い、俺がいるから」

「うん・・・ありがとう」

そう言って由香里走り去って行った。

由香里の背中が見えなくなり、家に帰ろうとした瞬間。

「！！あぶねえ！！」

俺はとっさにしゃがんだ。そしてさっきまで俺の首があった場所を

槍が通過した・・・

俺死ぬやん！！

「おいこら！！どこだ！！出て来い、俺死ぬとこだっただろうが！！」

俺が槍がとんできたほうを見て叫ぶと、ひょこ、っと身長140前後でショートカットで

まだ中学1，2年くらいの女の子が現れた。

「おまえか・・・なぜ俺を殺そうとしたんだ？わけを聞きたいね・・・」

俺は天使化した。

「え、えっと、あの、す、すみません・・・」

・・・あやまったーーーーー！！

「え！あ、ああ、う、うん」

うわ、なんか俺が悪いみたいだな・・・

「えっと、それで死んでいただこうと思ったのはですね・・・」

ええ！そんな簡単に話していいんだ！？

「その、あなたが私を殺そうとしてるって、黒い人に言われたので・・・」

君とは初対面ですが！？

「誰だよ・・・そんなデタラメ言ったやつ・・・」

「わたしですよ・・・」

女の子の後ろから黒いマントをはおりおまけに変なお面までつけている男？がいた。子は黒い羽を広げて俺の天使化したみたいになった。違う所といえば、羽が悪魔みたいになっていることくらいか？

「この人です！！」

女の子が叫ぶ。

「あなたは、この男を殺さないのですか？」

「この人は私のことを知らないうえに、攻撃もしてこなかったです！」

男が不気味に笑う。

「今も、あなたを殺そうとチャンスを狙っているはずですよ？」

「そんなことないです!!」

その瞬間俺は女の子を抱きかかえていた。背中に走る激痛。

「あ……」

女の子は目を見開いていた。

「ほおおおおお？自分を盾にしましたか」

「いってえ……」

俺はよろめきながら竹刀を日本刀にして構える。

「大丈夫ですか!？」

泣きそうな声で聞いてくる。

俺は荒い息だったが意外と冷静だった。

「ああ、それ……に、骨までは……いってない」

縦に裂かれた背筋付近が痛む。

「おやあ？元気ですねえ……これではこっちの分が悪い……、

引かせていただきますしよう、やっかい厄介な二人を消そうと思ったのですが、
しかし、聖光神シャインエンジェルと破壊神タナトスが相手とは、
わたしもアンラッキーですね……」

男はそう言って消えた。

俺はひとまずほっとして、膝をつき天使化を解いた。

「君、怪我不いか？」

女の子は首をコクコクと縦に振り、

「あなたのほうが大変です!!」

「大丈夫だ、いてて……、俺は家帰るから」

そう言って立ち去ろうとすると、

「あの、私も行っていいですか？」

もじもじと、女の子が聞いてきた。

「まあ、いろいろ話も、したいしな……」

「ああ!! すいません!! 早く行きましょう!!」

視界がぼやけてきた、急がないと……な。

帰宅

ガチャ

「た・・・だいま・・・」

「お帰り甲斐k・・・」

絶句するな由香里。

「どうしたn・・・キャアーーーー！！」

悲鳴を上げるな鈴、傷に響く。

「どうしたんd・・・」

「鈴ちゃんどうかしt・・・」

「あ、あの、なにかあつt・・・」

ここで運悪く、啓太、長閑、麻野がきた。

「あ、お、おじゃまします」

一人冷静な女の子。

「あ、あの、み、みなさん、す、すみません！！」

撤回、メツチャ焦ってる。

「どうしたんだ、甲斐！！おい！！大丈夫か！？」

「ひどい血じゃない！救急車呼んで！！」

「キャアアアア！！」

心配してくれる啓太と、冷静に、救急車！！と長閑、叫ぶ麻野。

「甲斐くん！お母さんが来るから！！」

「甲斐くん！！がんばって！！」

叫ぶ由香里と鈴。また泣かせた・・・

「はいはい！！どいてどいて！！！！」

母さんが来た。さすが、状況をよく理解している。

「じゃあ、治すからね、ちょっと見せて・・・これは傷残るわね」

そう言って、母さんはみんなのいる前で治療術を披露した。それと解説ありがとう。

「ふう・・・。ありがとう、母さん」

治し終わった後、皆は啞然としていた。由香里、鈴以外。

「とりあえず・・・、みんな・・・鈴も向こうへ行ってて」

俺がそう言うのと長閑が、

「ちよっとまって、何が何だか説明してくれないかしら？」

「それは、鈴が説明してくれるから・俺らは大切な話があるから、待っててくれ」

そう言うのと頷いてみんな居間へいった。

「じゃあ本題に入るけど、その前に、自己紹介してなかったな、俺は北村甲斐、17歳だ、今日で」

「母の亜美よ、年齢はヒ・ミ・ツ」

「妻の秋野由香里、16歳」

「おい、由香里俺らは夫婦じゃないだろ、恋人だ」

女の子はきよろきよろしていたが、

「美夜^{みよ}です。美しい夜と書いて美夜です。えっと、14歳です」

「？苗字はなんていうんだ？」

俺が不思議に思って聞くと、

「ありません・・・両親が幼い頃いなくなって、名前しか覚えてないんです」

「そうか・・・」

俺が気まずそうにしていると、

「ところで、話って何なの？甲斐」

母さんが声をかけてきた。

「あ、ああ、そうだったそうだった」

俺は詳しく帰り道でのことを話した。

「おかしい」

由香里が呟いた。

「なにが？」

「今までは、獣のような存在でただ戦うだけの生物兵器だった。でも、しっかりとした知能を持っていた。だから、おそらく幹部の關係」

由香里が怒ってる・・・たぶん、雰囲気がなんとなく違う・・・

「じゃあ、直接俺を消しに来たのか、美夜ちゃんまで使って・・・」

「ええ」

「あ、あの、すいません・・・」

「いいのよ、仕方のないことじゃない、それに甲斐は気にしてないわ」

ね！っと母さんが言ってくる。

「ああ、全然気にしてないから」

ありがとうございます・・・と美夜ちゃんは言って笑ってくれた。

「まあ、次ぎ来たら、そのときはそのときだ、俺は負けない、絶対に」

俺が気合を入れると、

「私も戦います！戦わせてください！！」

「でも・・・」

美夜ちゃんのはなったセリフの返答に困ったが、

「わかった、でもバックアップをたのむ、直接は俺がやるから」

美夜ちゃんは、ぱあっと顔を明るくした。

「そ、それと、」

美夜ちゃんはおもいとして言いにくそうだったが、

「あの、帰る所がないので、ここに住まわせてくれませんか？」

「え、じゃあ、いままではどこに？」

「ネットカフェです、バイトで稼いでました」

・・・やべえ、涙でそう！！

「じゃあ、学校は？」

「えっと一応通ってます」

「どの学校？」

俺が聞くと意外な答えが返ってきた。

「光学園の中等部です」

おいおい、マジか、奇跡だなおい。

「まあ、母さん、どうする？」

「別にいいわよ？」

「由香里は？」

「妹ができたようでうれしい」

「な、何を言い出す、由香里」

「じゃあ苗字は北村ね！」

「母さん・・・はあ、やれやれ・・・」

「お、お兄ちゃん・・・」

のりのり！？

「み、美夜ちゃん？」

俺がオロオロしていると、

「兄妹ですから、美夜って呼んでください」

そう話していると、

「うふふ、美夜？ 兄妹は敬語使わないわよ？」

「う、うん、お、お兄ちゃん、よ、よろしく・・・？」

「お、おう・・・じゃ、じゃあ、由香里と鈴はお姉ちゃんだな・・・」

「

「うん、由香里お姉ちゃんと鈴お姉ちゃん」

話もまとまったので居間に行った。

「わりい、長引いた、いろいろあってな・・・」

俺が謝って入ると、

パンツパン、パンツ！！

『甲斐、誕生日おめでとう！！！！』

急にクラッカーのなる音がしていきなり誕生日おめでとうって、ビ
ビった。

「みんな・・・」

そうか、俺が、由香里が、母さんが天使だってことを知っても、普
段どうりに接してくれるのか・・・、俺は、いい友達をもったよ・・・。

美夜も同じことを思ったようで、

「いい友達を持ってるね、お兄ちゃん・・・」
つと、言ってくれた。

「ねえ、美夜お風呂入ってらっしゃい、気持ち悪いでしょ？ ほら、

こっちよ」

母さんがそう言って美夜を風呂場につれて言った。

「お前に妹いたっけ？」

「そうね、初めて見たわ」

「かわいいね」

「私はいとこだよ？」

口々に何か言うな。

「まあ、今さっき妹になりました」

「私たちの妹」

俺たちが談笑していると、

「ママ、ありがとう、さっぱりした」

風呂からあがった美夜が入ってきた。

「あ、そうだ、まだみんなに自己紹介してなかったな、美夜」

「あ、うん。えっと、北村美夜です！美しい夜と書いて美夜です！14歳です！」

「俺は沖野啓太、16歳だ、よろしく」

「私は桜井長閑、17歳よ、よろしくね？」

「ええっと、麻野瑠璃、16歳です、仲良くしましょう」

「私は甲斐君のいとこで、古沢鈴、14歳中3よ、よろしくね！」

「鈴お姉ちゃん、みなさんよろしくです！！」

ペコリッ、と小さなお辞儀をして俺の隣りに腰を下ろす美夜。

そしてその夜の俺の誕生パーティーは盛り上がった・・・色々あったけど。

ちなみに、由香里からのプレゼントは腕輪と・・・熱いキスだった。

第十四話（後書き）

まえがきから変なテンションですみません。

今回は戦闘シーンあります。

謎の男が登場しましたね・・・定番です、お約束です。
では、次回でまたお会いしましょう。

第十五話（前書き）

遅くなって済みません。

レポートやら課題やらでなかなか進みませんでした。
つと言いつきはこれぐらいにしておきましょう。

第十五話

翌日

日の光がカーテンの隙間からもれている、今日は土曜だし、珍しく部活もないので

ゆっくり寝ていようと思ったのだが・・・

「さあ美夜ちゃん、やっちゃえ」(ぼそぼそ)

「ええ！？ 鈴お姉ちゃん、でも・・・」(ぼそぼそ)

「大丈夫・・・甲斐君は強いから・・・」(ぼそぼそ)

「由香里お姉ちゃん・・・うん、がんばるです」(ぼそぼそ)
歩み寄る影が近づいてくる。

「お兄ちゃん朝です、おきるです!!」

どすん!

「ぶおふおお!?」

昨日よりは強くないが、それなりの衝撃が俺の腹に・・・

「あのな・・・美夜に変なこと教えるなよ・・・」

俺が由香里と鈴の方を見て注意すると、

「いいじゃんいいじゃん!」

「おはよう、甲斐君・・・」

全く反省の色なしだった。

「あ、あの、お兄ちゃん、おはようです・・・」

美夜はすまなそうに朝の挨拶を発した。

「ああ、おはよう、でもね、こういうことは真似しちゃ駄目だよ?」

俺の注意を聞いて美夜は頷いて俺から降りた。

「じゃあ、俺は二度寝をしますんで・・・おやすみ!」

俺は布団に潜り込んだら俺の隣に由香里がいた・・・いつ入ったんですかねえ?

「おい、由香里・・・くつつきすぎだ・・・」

「私も二度寝・・・」

・・・やっぱり起きよう

俺は着替えて下へ降りた。

「で、休日に俺を早く起こした理由を聞こうか？」

朝飯を食べ終わり、一息ついたとき由香里たちに聞いてみた。

「いや、亜美さんがせっかく天気がいいんだから遊んできなさいって・・・」

確かに一日中寝ているのもどうかと思うが、俺たちは小学生か・・・。

「で、お前らはどこに行きたいんだ？」

一応みんなの意見を・・・。

『ゲームセンター!!』

満場一致かよ・・・っていうか天気が良いつて部分無視してるな、こいつら。

「理由は？」

「いったことない・・・」

「たのしいからだよ!!」

「えっと、由香里お姉ちゃんといっしょで、行ったことがないです・・・」

一人を除く二人の意見を採用しようか・・・。

「わかった・・・じゃあ、支度しろ、連れてってやるから・・・」

「わーい、ゲーセンだー!!」

「そこは楽しい・・・?」

「わくわくするです・・・!」

支度を終えた俺たちはゲームセンターへ向かった。

ゲームセンター

「久しぶりのゲーセンだー!!」

「ここが、ゲームセンターですか？」

「広い、甲斐君・・・離れちゃダ・・・」

「・・・みんな、迷子にはなるなよ？」

「わかってるよー♪」

「まかせるです！お兄ちゃん！！」

「甲斐君にくつついてる・・・」

・・・先行き不安だな・・・

「甲斐君・・・あのUFOキャッチャーってなに？」

「ああ、あれはあのUFOみたいなやつについている挟むやつで下の景品を取るんだ」

「・・・あれ、取れる？」

そういつて由香里が指さしたのはかわいいクマの人形・・・などではなく

けい○ん！のフィギュアだった。まあ、二期やってるしな。

「どれが欲しいんだ？ いっぱいあるぞ？ 三つだけな」

由香里は悩んで、全員じゃなきや意味がないとか

ムギだの滯だの、うんたんやら言っていたが、

「じゃあ、唯と憂とあずにゃんがいい」

と一番取りにくい所にあるのを選んだ。かわいいのが好きには変わらないのかな？

「ん・・・むずかしいな・・・」

二百円入れて掴むためのUFOを動かす。

「まず唯からお願い」

由香里は興味深々というふうにはガラスの中を見ている。

「あれか・・・もうちょつと・・・右かな・・・？」

キャッチャーの取る部分がパッケージに引っかかる・・・

「あ・・・取れた・・・」

俺は予想外だったので声を上げてしまった。

「甲斐君すごい！！」

「お兄ちゃんは得意なんですか？」

「ありがとう」

「ま、まあ、うん・・・どう致しまして」

なんか照れくさくなつたじゃないかー！

「しかし、よく見ると細かいな」

俺はよくフィギュアを見るととても細かく再現されていた。

だって指先にちゃんとピックもつてるんだぜ？

でもこれくらい普通なのかな・・・？

「よし、この調子で次いっちゃおう！」

テンションが高い鈴が急かしてくる。

「わかったわかった・・・」

二百円を入れて・・・

ガコンッ

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「由香里・・・取れた・・・」

ええええええ！？ちよっ！？取れたんだが！？

「甲斐君すごいね！」

「お兄ちゃんカッコイイです！！」

「・・・」ポワポワ

由香里がポワポワしてる！？っていうか、こういうラッキー続いた時って・・・

「ま、まあこういうこともあるって！！」

「お、お兄ちゃん、ファイトです！！」

「甲斐君、落ち込まないで・・・」

「いや、大丈夫だ。気にしてない・・・」

予想どおりとはいえ、あのあとは散々だった。

まさかあのツインテールの子のフィギュアに2200円使うなんてな・・・。

「よし、気を取り直して、他にやりたいやつとかないか？」

俺がそう言うのと鈴がニヤ〜っと怪しい笑みを浮かべて、

「甲斐君たちはあれに出てもらおうと思います!!」

そう言って連れてこられたのは、

「カップル限定・・・ゲーム大会!？」

なんじゃこりゃー!! っていうかなんで今やるの!?! 夏とかでいいじゃん! いま秋!

「もうエントリーしてきました!!」

「おい! 出るなんて一言も言っていないぞ!？」

「まあまあ、いいじゃんいいじゃん!」

反省してないな・・・こいつ。

「はあ、由香里はいやだよな?」

頼む、嫌だと言ってくれ!!

「別にかまわない」

やっぱ無理か・・・。

「諦めるしかないのか・・・」

ちくしょう・・・鈴、いい笑顔しやがって!

「えっと、お兄ちゃんたちガンバルです!」

ああ、美夜は鈴と違っていい子だなあ。お兄ちゃんうれしいよ・・・。

「はあ、じゃあ行ってくるから・・・おとなしくしてろよ?」

俺は釘をさしてからステージ（ご丁寧に用意されていた）まで行く。

第十五話（後書き）

今回は結構短いです。

早目に執筆をしなければと思いつつも、ぐだぐだしてしまいます。さて、次回はあとがきで各キャラクターの細かい設定を公開しようと思います。

Oh, study!!

第十六話（前書き）

えー、今回はかなり短いかもしれません。
できれば一日の終わりで投稿したかったのですが・・・
とにかくすみません。

第十六話

ここからは甲斐、由香里以外はネームをつけたいと思います。

司会者「さあ、このゲームに参加するカップルはこちらに来てください！」

「始まるのか・・・ゲームって何をするんだろう？」
まあ、てきとうに終わらせればいいか。

「甲斐君・・・手を抜いたらだめ・・・」

由香里にはばれてましたか・・・

司会者「ゲームは男女分かれておこないます！」

男1「分かれて・・・？寂しいな」

女1「寂しいよう、ダーリン！！」

うわ、ベタベタでもい・・・女が・・・

司会者「その点は心配なく、隣で見えていただいてもOKです」

男1「よかったね・・・」

女1「うん、ダーリン！」

はあ、早く始めようぜ・・・

司会者「ではまず男の方からいきましよう！！彼女を守る力がどれだけあるか、

このマシンで競い合ってもらいます！！」

そういつて用意されていたのは、パンチの威力をはかる、あれだ。

司会者「では、抽選で順番を決めてもらいましよう！」

男2「じゃあまず俺だな！」

うわ、いきなり筋肉質だ・・・

男1「勝てるかな・・・？」

いやいやいや！！無理だと思うよ！？

男2「ふん!!」

ドガ!!

男2の攻撃!! 591Kgをたたきだした!!

男1「えい!」

バシ!!

男1の攻撃!! 438Kgをたたきだした!!

男3「次は俺やな!」

おお、これはまた細マッチョ!

男3「ふっ!」

バシン!!

男3の攻撃!! 649Kgをたたきだした!!

男3「どやっ!!」

すげえな・・・

女3「きゃー!! さすがー!!」

女2「私の彼が負けちゃった・・・」

女1「力だけじゃなくてやさしさがあるもん!!」

思い思いのことを言ってますね・・・

「甲斐君・・・次」

由香里にうながされてマシンの前に立つ。

「本気出さなかったら、今日の夜私の好きなようにさせてもらう・・・」

・

はい、脅しキター!!

「わ、わかってるよ・・・」

男2「なんだ、ガキじゃねえか」

男1「がんばれよ」

男3「まあ超えられんだろう」

この状況は・・・苦しい・・・

「甲斐君・・・?」

「わかったわかった!!」

どうなっても知らんぞ?

「すー、はー……」

「がんばって……」

「っ!!!」

バゴン!!!

甲斐の攻撃!!! 864Kgをたたきだした!!!

「甲斐君……」

見つめるな恥ずかしい……

司会者「……」

男1「……」

男2「……」

男3「……」

女1「……」

女2「……」

女3「……」

会場一瞬、静寂に包まれる……

「だからいったじゃないk」

会場一同「うおおおお!!!」

え?え?

司会者「なんと、店内1位を堂々と叩きだしたぞお!」?

「い、1位って……ええ!」?

ちらっと、参加している人たちを見ると、固まっていた。

司会者「では、次は女の方のゲーム……いや、投票を始めます!」

なんじゃそりゃ……

司会者「ルールは簡単です、愛しの彼との絆、もしくは思い出を語ってもらい、

この会場の皆さんに投票してもらいます!」

ゲーム関係ないじゃん!!!

司会者「なお男の人のところにも投票してもらい、
合計で勝者を決めさせてもらいます!」

「甲斐君、見てて・・・」

「お、おう・・・がんばれよ？」

俺がそういうと由香里は少し笑い、ステージの上へ立った。

第十六話（後書き）

キャラ紹介第1弾！！～家族編～

北村甲斐きたむらかい

10月9日生まれ

光学園高等部 2年生

身長…172？

体重…67？

髪型…キラ・ヤマトみたいな髪型

性格…温厚でやさしいが女には甘々。

正義感が強い

部活…剣道

種別…シャインエンジェル

武器…日本刀

好き…由香里、ニツキの八つ橋

嫌い…いじめ、とある先輩、悪

秋野由香里あきのゆかり

11月26日生まれ

光学園高等部 2年生

身長…157？

体重…訊かないで・・・

B…78 W…59 H…74

髪型…黒髪ロング

性格…無口だが純情。

愛情がないわけではない。

部活…剣道・マネージャー

種別…ハートエンジェル

武器…???

好き…甲斐、アニメ・マンガ

嫌い…嘘を吐く人、とある先輩、辛い物

北村亜美
きたむらあみ

5月20日生まれ

身長…152?

体重…うふふふ

B…78 W…60 H…77

髪型…ショート

性格…超やさしい、からかうのが好き。

子供みたいな一面を持つ。

職業…???

種族…ディアンケト

能力…治癒能力

好き…家族、甲斐の友達、お昼寝、和菓子とお茶

嫌い…ピーマン、長い生き物（ミミズ・百足など）、いじめ

古沢鈴
ふるさわすず

2月4日生まれ

紅葉中学 3年生

身長…153?

体重…訊くなー!!

B…69 W…58 H…65

髪型…濃いめの茶色でツインテール

性格…超高出力、ムードメーカーでいつも元気

部活…陸上

種族…人間

武器…なし

好き…運動、アイス、写真を撮ること

嫌い..くだらないこと、バカ、野菜

北村美夜 きたむらみよ

12月22 日生まれ

光学園中等部 2年生

身長..143?

体重..恥ずかしいです...

B..まな板 W..54 H..68

髪型..こがねいろけんこうこつ 黄金色肩甲骨までのストレート

性格..気弱で押されやすいタイプ、やさしい

部活..帰宅部

種族..タナトス

武器..破滅の槍

好き..かわいい物、星空、甘い物

嫌い..怖い人、暴力、卑怯なこと

第十七話（前書き）

明後日から夏休みだ、わーい。
・ ・ ・ まったく関係ないですね。

第十七話

ふと、目を泳がせているとさっきの女の人たちが視界に入った。

女1「任せてね！ダーリン！！」

女2「思い出なんてたくさんあるから大丈夫だね！」

女3「ここで挽回しなきゃ！！」

女1、2、3「絶対勝つ！」

うわーすごいやる気だな・・・

司会者「まず一番の方どうぞ！！」

女2「はい！彼との思い出なのですが、キャンプへ行った時のことです、

私が重い物を運んでいるときに、さりげなく代わりに持ってくれたんです。

それが私にとって、心が温かくなる出来事でした！」

結構いい話だな・・・見た目によらずいい人なんだな！。

司会者「とてもいい話でした！！さりげないやさしさ・・・いいですね！！」

それでは、次の方どうぞ！！」

女1「はい！私の彼は・・・・・・・・・・」

っとまあ、どんどん進んでいき、由香里の番が回ってきた。

司会者「さあ、次は最後の秋野由香里さんです！！！」

「はい、私の彼とは公園で出会いました。そのころは使命や、義務のような感覚で彼に

付き合おうとしていました」

おい、そんなの初耳だぞ・・・っていうか、考えればわかることか・・・？

「しかし、彼と触れ合っているうちに使命や義務などではなく、心の底から

‘好きだ’、と思えるようになりました」

会場からの俺への視線がなんか、尊敬？に近いような・・・。

「そんな彼は、私のためにいつも傷ついて戦ってくれています・・・
時には傷だらけで帰ってきます。私が心配すると、いつもいつも・
・

辛いはずなのに、笑顔で大丈夫だよって、いつてくれるんです。

私はそんな彼を世界一、宇宙一愛してます」グスッ

由香里は途中から泣いていた。それがうれし泣きなのか、違う涙なのか・・・

でも、俺は由香里を守っていこうと再決心した。

司会者「なんていい話なんでしょう・・・傷だらけでも心配をかけまいとする

そのやさしさ・・・感動しましたあ！！」びええええん

司会者は何というか、もう号泣だった。

司会者「ぐすん、いやはや失礼いたしました。さて、投票が済んだようです。

では、男性部門から見ていきましょう！ちなみに、投票者数は100人に

行ってもらいました！！」

そんなにいたんだ・・・

司会者「では、オープン！！」

男1	16票
男2	09票
男3	25票
甲斐	50票

司会者「ということで、男性部門理想の彼氏第1位は、北村甲斐さ

んです!!」

「おおう!? 優勝しちゃいましたよ!?」

「甲斐君・・・流石・・・私の夫」

「ゆ、由香里・・・? まだ結婚してないんだが・・・」

「じゃあ・・・婚約者?」

なぜに最後が疑問形なんだろ・・・

負けたカップルは悔しそうにしていた・・・なんかすみません。

司会者「では次は、女性部門です!!」

女1 07票

女2 13票

女3 05票

由香里 75票

司会者「おめでとうございます!! 理想の彼女第1位に輝いたのは、由香里さんです!」

由香里は何というか・・・ぶっちぎりだった。

「私の甲斐君が1番素敵・・・」

由香里の眼がとろんとしていた・・・何を考えているのやら・・・

司会者「では、総合優勝を果たしたカップルには・・・ペアルック

のネックレスが

贈られます!! では前へ来てください!!」

そう促されて、俺と由香里はステージの1番中央の1番前へきていた。
うなが

司会者「では、お互いにネックレスを相手の首につけましょう!!」

そうして、結構高そうなネックレスを由香里の首にかけてやる、由香里もかけ終わった瞬間・・・

「甲斐君・・・」

由香里の腕が首に巻きつき・・・顔が近づいてきて・・・
チュ・・・

「?・・・!!!!!!」

突然のことだったので反応が遅れたが・・・由香里は間違いなく俺とキスをしている!

「~~~~~っはぁ!お、おい!こんな人前でなにをするんだ・・・」

俺が恥ずかしさのあまり叱ると、

「甲斐君・・・大好き・・・」ニコ

まったく聞いていなかった様子で嬉しそうな笑みで大好きとつぶやいた。

司会者「おっと!アツアツなところ悪いですがそろそろ終わりの時間です!

またいつか逢うその日まで、おさらばです!」
こうして激戦?は幕をとじた。

帰り道

俺の横で歩く秋野さんは嬉しそうに微笑んでいた。

「由香里お姉ちゃん嬉しそうです、鈴お姉ちゃん!」

「甲斐君とのおそろいだしねー」

そんな会話のなかでもう何回シャッター音が鳴ったことやら・・・

「どうだ由香里、ゲームセンターは楽しかったか?」

俺が由香里の方を見て訊くと由香里は嬉しそうに、

「とっても・・・」

と答えてくれた。

「そうか、またみんなで暇なとき来ような!」

俺は由香里だけではなく、後ろにいた鈴と美夜にも向かっていった。

「甲斐君楽しみにしてるよ」

「また行きたいです!」

俺はそんな二人のいい返事をききながら家の前まで来た。

『ただいま（です）！！』

「はいはい、おかえり、たのしんできた？」

「お母さん、甲斐君とおそろい・・・」

由香里はさっそくネックレスを母さんに見せていた。

「あらあら、いいネックレスじゃないの？よかったわね」

母さんに褒められて顔を赤くしている由香里を見ると横から美夜が服の袖を引っ張ってきた。

「ん？どうしたんだ？美夜」

美代がなぜか恥ずかしそうにもじもじしていた。

「あ、あの、お兄ちゃん、ごはん食べ終わったらでいいので、由香里お姉ちゃんと一緒に勉強を教えてくださいませんか？」

「勉強？まあいいけど・・・どうして急に？」

俺が疑問に思っただけ返すと、

「月曜日からテストなんですけど・・・わたし、理科と国語が苦手なのです・・・」

「テストか、えらいな、前もって勉強とは・・・鈴にも見習ってほしいな。」

そんなことを言っていると、

「ほらほらはやくー！ごはんできたってさー！」

鈴がよんでいる、そういえば俺たちはまだ玄関だったな・・・。
食後、今美夜は俺と由香里の部屋に来ている。

「じゃあ、理科は俺、国語は由香里が教えるから、まずどっちを先にやるんだ？」

「じゃあ、国語を先にお願いするです！」
やる気満々な美夜を見ると応援したくなるなあ。

「じゃあ、まずこの問題から・・・この文の例題を読んで次の問いに答えなさい」

お？さっそくはじめたな・・・

「わかったです！では、北村甲斐と秋野由香里はアイしあってい

ました。

とうとう二人はケツコンすることになったのですが、ワルい人たちが二人の

ケツコンを邪魔しました。北村甲斐はその人たちをやっつけて、二人は

シアワセになりました。次の問いに答えなさい」
ん・・・？なんかおかしくね？

「おい、由香里、美夜、今明らかにおかしかったよな・・・？」

「では第一問、私と甲斐君の関係は？」

「超ラブラブです！！」

「正解・・・」

聞いちゃいねー！！

「おい、ちよっとまで・・・なにかが確実におかしい」

「心配しないで・・・ちゃんと教えてる」

「はい、わかりやすいです！！」

「そ、そうか？ならいいのだが・・・」

「じゃあ、カタカナを漢字に・・・」

そして国語が終わって俺が担当する理科を教えることになった。

「よし、じゃあまず美夜はどこが解らないんだ？」

「えーっと・・・化学が苦手です・・・」

化学か・・・、なら楽だな。

「いいか？美夜、化学は暗記だ、頭のいい美夜なら楽勝だ！」

「本当ですか？」

「ああ、じゃあまずは・・・簡単な水からいこう。水の化学反応式を書いてみてくれ」

「 $4\text{H} + \text{O}_2 \parallel 2\text{H}_2\text{O}$ こうですか？」

ふむ、おしいな

「惜しいぞ、美夜。答えは $2\text{H}_2 + \text{O}_2 \parallel 2\text{H}_2\text{O}$ だ」

「どうして4じゃダメですか？」

「最初の2は H_2 がいくつあるかを示しているんだ。だから4Hだ

と水素原子が四つあることになるから不正解になるんだ」
俺が丁寧に説明すると美夜は仕切りに頷いていた。

「わかったか？」

「お兄ちゃんの説明解りやすいです！」

「そうか、ならよかった、じゃあ、次は酸化銀の……」

そうして理科も終わり時計を見ると12時を回っていた。

「じゃあ、月曜頑張れよ!!」

「はい、やってやるです!!」

元気良く返事をした美夜は自分の部屋に戻っていった。

「さて俺等も寝るぞーって、もう寝てらしたか……」

俺の隣では由香里がぐっすり眠っていた。

「ふう、風邪ひくぞっと……」

俺は由香里をベッドに移してから自分もベッドへ入った。

「じゃあ、おやすみな、由香里」

そう言って俺は目を閉じた。

第十七話（後書き）

元素記号のやつが変換できませんでした。
分かりにくくて本当にすみません・・・。
お詫びにキャラの能力と武器を書いておきます。

北村甲斐

能力…予知能力・棒状のものを日本刀に変えることができる。
武器…せいとうじゃめつ聖刀邪滅ノ_{たち}太刀

秋野由香里

能力…天使を見分ける眼力ことができる・相手の器の大きさが解る。
武器…なし

北村亜美

能力…蘇生治癒・一定時間自動治癒。
武器…なし

北村美夜

能力…普通の人間に限り寿命が解る・槍を境界から取り出せる。
武器…破滅の槍

おしらせ

遅くなった上に本編ではなくすみません。

今回はちよつとした報告をしようと思います。

まず、次の更新はすごく遅くなると思います。約三か月も更新止ま
ってたのか！？と

思う人もいるでしょうが、言い訳を言わせてもらうとパソコンがち
よつとしたトラブルでデータが全て

消えてしまいました。なので書きだめしてあったのが消えたので更
新が遅くなると思います。

そしてもう一つはこんな小説を読んできださっている皆様にお礼を
申し上げます。

文章力もまだまだでストーリー、キャラ設定もいまいち（だめだめ
かな・・・？）なこんな小説ですが、引き続き更新を再開した時に
読んでもらえつるとうれしいです。

では、更新できるように頑張るので応援をよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2974k/>

Last Angel

2010年10月26日13時29分発行